

と言つたが、本人は怒りも爲ないで唯笑つてゐた。
今日で最う一週間に成る。朝の間に洗濯物を片づけたお光が、机の傍に坐つて物珍らしさうに仕事を眺め、

「貴方、疲勞れやしませんか。」

「否。」と言つたきり、群松は息も吐かずに手を動かしたが、旋て額の汗を拭いて、慙ししながら向直つた。

「眞實に此頃は一生懸命ですね。」

「新なる努力だ。」

「然うですか。」とお光は解らないので唯瞬を爲る。

「今迄の不勉強を取返すのはなかく骨が折れるよ。」

「ですけれど、貴方餘り働いて今度は其所爲で體なんか悪くしちやあ困るわ。何しろ病氣揚句ですもの！」

「何有、心配するには及ばんよ。精神も體も使へば使へ程達者に成る。人間といふ奴は皆一種の張合で生きてるんだからね。外部の壓迫が強ければ随つて物が固く成る。」

とお光の持つてゐる煙管を取つて、忙しさに二三服葉を喫む。

六十九

お光は端然と坐つたまゝで「其は然うかも知れないわね。妾達だつて以前お座敷の忙しい時程お酒を飲んでも酔はなかつた覺が有りますわ。」

「其處だ！要するに張合さ。」と群松は肩臂を怒らして「人間が生きてゐるのも畢竟忙しいからだよ。第一食つて行かにはやあ成らんといふ事は壓迫さ、だけでも其が爲に我々は汗を流して働く。食ふといふ事は實に無意味だけれど、働かには複雑な意義が有るだらう？」

「えい。」

「解つたかい。勞働は神聖なものだよ。然う思へば斯うして働いて行ける我々は、幸福な人間と言はなけりや成らんぢやないか。」

「えい。」とお光は無暗に感心してゐる。

「まあ我々の手足を動かすのを見て呉れ。」と仕方示して「將來には光が有る。人生は

實に面白い。」

「何だか知らないけれど、然うして仕事さへ爲て下されば妾達だつて嬉しいのです。けれど餘り無理な事を爲て、又體にでも障つちや大變ですから。」

「大丈夫だといふ事さ。今聴かしたぢやないか、我々は仕事から營養分を取るんだと云ふのに！」

「だつて夫にも程が有るわ！」

「成程、過ぎたるは猶及ばざるが如しか。」

と群松は笑つた。

「未だ前途が長いのですから、那樣に一氣に爲ないだつて可いわ。時々骨休めを爲なければね。」

此方は黙つて頷く。

「然うして下さい。眞實に……明日といふ日も有ります。」

「餘り變つた事を爲ると又雷が落ちるかも知れん。」

「全くですよ。」とお光は嫣然して見せる。

「明日の月日の無いやうに……か、彼歌は二上りだね。」

「おや！大變浮かれるぢや有りませんか。餘程何うか爲てゐる。」

群松は膝を抱へて舟を漕ぐやうな眞似を爲てゐたが「浮かれると言へば、お母さんは何處をほつさ歩いてゐるんだらう。」

「麻布へおいでなすつたのでせう。何だか今朝は周章してゐらしたわ。」

斯様事を言つてゐる間、脂の詰つた煙管が彼方此方と取交されて、戸外には夕暮を忙しう豆腐屋の喇叭が、秋らしい音を立てゝゐる。

「考へれば早いものね。」とお光は何を思つたか身に沁みた語調で言出した「妾此處へ來てから最う一年に成りますよ。」

「然うだ。確十月だつたな。」

「え、」と美しい眼で見上げて、彼の時分は随分大騒でした。」

「然う〜。群松はゴロリと横に成つて」

「其頭はお互の血が燃えてゐたつけ。然し其から貧乏の爲ついで、何うだ？最う大概飽が來たらう。」

「誰が？」

「お前がさ。」と腹這のまゝ足をバク／＼して「頼に然う書いてあるせ。」

「何とでもお言ひなさい。然ういふ人の方が餘程險悪なのだから。」

横を向いて長く煙を吹くと、それが一筋糸のやうに靡いて、見窄らしい軒端の釣窓に絡るかとはかり。

七十

群松は類杖を突いて頻に往事を追懐するらしかつたが、

「然し變つたなあ。彼の頃のお前と今とは全然別の人に成つて了つた。」

「那樣事は何うでも止らざるや。自分の勝手なのですから……」

「勝手といふものは即ち一時の感情だから或時が来ると霜のやうに消えて行くのだ。」

「何故又今日は可怪しな事ばかり言出したのです？」とお光は後毛を掻きながら、何とも思つてゐやしないのに……貴方は變に疑り出したのね。」

「否、俺は想像するだけだ、疑つて何うの斯うのといふ考へは更に無いのさ。」

「ぢやあ氣に成るやうな事を仰有らないでも可いでせう。那樣……可怪しな。」と口にかけて偶と氣が着いたか「貴方、自分の方が最う可厭に成つたのでは無くつて？」

「馬鹿な事を言つちや可かんよ。」

「然うです。え、屹度然うですよ。妾が来た爲に方々と折合が悪く成つたり、斯様不自由な目に逢つたり爲るのですもの。全く妾の此處に居るのは貴方に取つて悪いのですね。」

「何うだか知らん。俺は聖人君子では無いから、長い生涯に善い事ばかり爲ては居られない。親類だの、世間だの、それを考へる位なら最初から一緒に成りは爲んのだ。其事は今迄幾度も言つてるぢやないか。」

「妾だつて思ふ事は幾度も言つてます。何うなつたとて面白く生きてゐられれば可いのですもの、毫とも不足なんか考へやしません。妾……ねえ貴方！」

群松は起上つて又精々と仕事に取かゝつてゐる。

「ねえ！」

「聽Sてるよ。」

「妾、此處より外に居る處は無いですよ。」
「ふむ、其が？」

「ですから、此上何うして欲しいの、飽きたのなんて、夢にも思つた事は有りはしません。それなのに貴方種々な事を言つて人を窘めるのですもの！」

「窘める？」と穴の明く程顔を見てゐたが、

「又充らん事を……自分こそ過日何と言つた。世の中は窮屈で可厭だ、義理が煩いと散々不平を並べたぢやないか。」

「其は彼の時少し癢に障つた事が有つたからです。貴方だつて能く生きてるのが面倒だの何のと言出して人を困らせる癖に。」

「處が、世の中は猶且面白かつた。俺は病氣が癒つて以來、すつかり宗旨を變へて了つたよ。是から先の事を見て呉れ、最う決して不平らしい事は言はんど。」

「然うして下されば、妾だつて一生懸命ですよ。だけど何程躍起と成つても、貴方の手助けは出来ませぬね。」
と言ふ時路次の溝板に後齒の下駄の足音がした。

七十一

「おや、お母様ぢやないかしら。」

と言捨にお光は迎に出ると、案の定母親のお新が狭い土間に立つて腰を伸してゐる處であつた。

「お歸りなさいまし。嘸お暑かつた事でせう？」

「何有、電車で來たから其程でもありませんよ。」と茶の間へ入つたが、何處か濟まぬ顔をして帯の間から煙草入を取出した。

お光は長火鉢の向へ座つて、番茶の急須へ湯を注しながら「今日は大層御悠りでしたのね。」

と言つたのを、何う取つたのかお新はハツと色を變へた。此方は氣も着かず、

「今もお噂を爲てゐたのですよ。」

「何か用でも有りましたか。」と匆忙煙草を吸つける。

「否、別に那樣事ぢや無いのですけれど……まあお茶でも。」

と出すのを、お新は軽く會釋して見たばかり、其まゝ手にも取らなんだ。で、一服して少時考へてゐたが、

『今日も金吾は家ですかい。』

『はい、勉強してゐます。』

『ふうむ。』と妙に思入つた體で、又傍見を爲ながら煙草を詰める。

『病氣が癒つてからは、御覽なさる通り全然今迄と變りました。此分で参りましたら段々家の方も樂にも成らうかと思はれます。』

『然様さね。』とお新は乘らぬ語調。

『ですからお母様も御安心下さいましよ。』

とお光は低聲で、然も熱心に言つた。

『え、然し働いた處で、何しろお金の多く入らない職なんだから。』

『でも貴方、假令お金は少くつても、精出して行つてさへ下されば其で十分ですわ。』

『さあ……』と座敷の方を見たが『其も三井坊主で無ければ可い。』

一方で斯う言ふだけ、お光は猶乘氣になつて、

『其ばかりぢや有りませせん。先日もお話を爲ました、彼の香川さんの方も、病氣が快く成り次第好い口が見つかりさうだといふ事ですの！』

『香川さんの方とは……築地の何とかいふ人かい。』

『然ふです。秋野さんはなかく、名前の賣れた方ださうですよ。』

『だがねえお光さん。』とお新は溜息を吐いて『今の世の中に他人の世話なんぞ當に成りはしないよ。那樣空な事を當に爲てゐると飛んでも無い目に逢ひます。』

今までは言ふなり次第で、何事にも嘴を入れなかつた母親が、突然斯様便無の態度に出たのを、お光は驚かざるを得なかつた。

此分では一切悲觀だ。一から十まで打壞した。折角本道へ立戻つた群松が斯の様子を見たら何うであらう。

然うで無くつてさへ棍の取り難いのに、此機會を爲損じてはと、彼女は一人當惑の眉を顰めるのである。

七十二

然し斯う理に落ちては爲方が無い、此上は何事も群松の耳へ入れまいと、お光は背を

折つて話を傍道へ外すのだが、お新は碌に返事も爲す、而して時々思出したやうに嘆息ばかり吐いてゐる。

少時すると群松は座敷から出て来たが、素氣無い語調で、

『お歸りなさい。』

と言つたまゝ、ノッソリ火鉢の傍へ座る。お新は有禁に氣色を和けて『今日も勉強ださうですね。』

『え、然し勉強した處で初りませんな。おまけに三日坊主かも知れないんだから。』と直に皮肉を言ふので、お光は一人ハラハラするのだ。お新もやゝトナツたが、

『けれど、何うか其三日坊主に成らないやうに頼みますよ。』

『其がね。頗る當に成りませんよ。何うせ澤山金の取れる仕事ぢや無し……又他人の話なんぞ當にも成りませんからな。』

益す出でて益す皮肉だ。お新は火皿の脂を掃除しながら、

『お前那樣事を言つて、妾の今話したのを悪く取つては困りますよ。』

『御心配なさるな。僕は決して御無理とは思はんし、假に思つた處で腹を立てるだけ

の氣力も無いのです。』

『困るねえ、然う言はれては！』と此方は爲う事無しにお光に救を求めぬ。

『貴方、然う有仰るものぢやありませんよ、お母さんだつて惡氣が有つてお言ひなすつたのではございせんから。』

『眞實に……』と少しは勢を得て『老人の癖に充らない種を時いて……氣に障つたら謝るよ。』

『……………』

『折角乗つて来た處を、妾が口出したばかりで氣を腐らして、も了ふと可けないからね。其處は吳々頼みます。』

『何有、其には及びません。假令一文も取れんでも、氣が向けば行らば居られないのですから……唯一寸言つて見たばかりなのさ。』

存外穩なので、お光は私に安堵する、母親も漸く落着いた途端、群松は快活に、

『時にお母様、今日は何處へおいでなすつたのです？』

『妾かへ、否、一寸其處までなんだよ。』

『でも歸途は電車へ乗つて來らしつたといふぢや有りませんか。』
 『あゝ。』と狼狽しながら『それは其……廣小路まで……』
 『然うですか。』と靜に顔を見上げたが、然りとて深く問うでも無く『それはお足勞れ
 でしたらう。僕も一つ山へ散歩にでも行つて來やうかな。』
 『其が可いでせう。』とお光は一も二も無く賛成して『少と運動していらつしやる方が
 樂です。』

『ぢやあ出代りだね。』

と笑ひながら座敷へ入つて、煙草と帽子を兩手に持つたまゝ再び茫然出て來ると、

『おい、座敷は片附けずに置いてくれ。』
 彼は久しぶりで飄然と戶外へ踏出した。

七十三

寐てゐたのは僅な日數であつたが、恰度期節の移際だつたので、戶外へ出ると目に人
 の物が總て變つたやうな氣が爲た。

歩つけた道を今日も一筋に阪本へ出て、それから上野の山へ入ると、最う殘無く秋で
 ある。此二三日は左右荒模様の空で、雲の往來も尋常ならず、西日の光の淡く射込む
 杉の木の間には朝が氣立ましく啼出して、それが森から森へと聲を傳へて行く。
 群松は其度毎珍らしさうに立止つては梢を見上げてゐたが、旋て博物館前から眞直に
 三枚橋の處へ出たのは角の大時計の五時少し前であつた。是から先は何處へ行かうと
 いふ當も無いので、洋杖の上に兩掌を載せ少時考へてゐる時、三四莖の腕車が御成街
 道の方から山内へ入つて來た、其眞先の車上の人は又しても淺山の夫人であつた。
 此方が見つけると同時に先方も振り返つたが今日は車を返す間も無かつたか、軽く目
 を爲たばかりで、流るゝ水のやうに過去のを、群松は猶且珍しげに見送つて、是を
 動機に又飄然ともとの道へ引返したのである。
 精養軒の傍まで來ると、何に急いだのか息切がして、やう／＼病後の疲勞を覺えたの
 で、彼は路傍の床几へ腰をかけ、袂から蓑を出して、心靜に暮行く山の景色を眺めて
 ゐると、恰度池の方から斜に上る石段の口から偶然現れたのは香川である。此方は
 直に見つけて、

「おい、香川君！何處へ行く。」
香川は驚いて振り返り「あゝ君か。」と其方へ近きながら「好い處で逢つた。是から君の家へ行かうと思つてな。」

「然うかい。其は行違に成らんで仕合せだつた。まわ掛け給へ。」

少し席を譲るのを、香川は黙つて見てゐたが「最う散歩に出ても構はんのか。」

「疾から散歩位差支無い體には成つただけだね。外に出るのも臆劫だから今迄は家に轉々してゐたのさ。」

「香氣だなわ。癒つたら直に手紙で模様を報して呉れ、ば可いのに。」

「那樣事を爲ないでも、其中君が来るだらうと思つてゐるから……。」

「アハ、彌よ香氣な男だ。然し僕も無沙汰を爲て居つたよ。」と並んで腰を掛け「手軽く癒つて何より結構だつた。然し病中は随分退屈したらう？」

「其代り、今は一生懸命で勉強してゐる。」

「勉強？！眞實かな。」

「小學校の子供ぢやあるまいし。嘘も眞實もあるものか。」

「然うすると又餘り俄勉強だから、先の事が氣に成る。」
群松は可厭な顔を爲て眞を隠らす。香川は散々一人で笑つた後、
「冗談は措いて、今日は君に好い事を報せに来たんだが、其様子では大に幸先が可いぞ。」

七十四

「何だい。君一人で承知してゐるやあ解らんぢやないか。」と群松は前齒で眞の吸口を噛む。

「だから今言ふ。過日一寸話も爲て置いた君の仕事の方は、漸く極りがついたよ。」

「仕事？！那樣話は覺が無いね。」

「氣楽だなわ。其爲に君は態々秋野の家まで行つたではないか。」

「ウン、其事か……全然忘れて居つた。實は餘り當にも爲てゐなかつたものだからね。」

其性質を知つてゐるから、香川は腹も立てなかつた。

「で、病氣が癒り次第、早速先方へ行つて見ろといふのだ。僕は今日築地の家を訪ねて紹介状を貰つて来た。」と懐中から其物を取り出して「都合で成るべく早く出向らたまへ。其分では最う大してかゝるまいから。」

「然うか。ヤ有難う。君には種々御心配を懸けた。」

「可笑しいな、急に改まつて！」と香川は失笑した。

「秋野さんへも早速禮に行かには成らん。君と一緒に出かけやうか。」

「那樣事は後でも構はん。左に右先方へ早く顔を出して置くのが必要だ。」

暮れかゝる木の下に、群松は添書の宛名を透見て、

「上田俊雄……此人が其家を新築する金満家なのかい。」

「否、それは技師ださうだ。其人から更に先方へ紹介するのだらう。」

「ハ、ア。」と又たしげくと眺めながら「随分亂暴な字だなあ。」

「我々と同じ事さ。形を爲してゐれば可いといふ流儀なんだから。」と香川も覗込んだが「是で用は済んだ。では僕は歸らう。」

「然う急がんでも可からう。」

「君は又何時まで此處に居る意なんだ。病わがりだといふのに、毒だよ。」

「だから家まで同行しやう。」

「俺の家へか？」

「否僕の……さ。其方が距離が近い。何うせ君は其意で来たのだから、次手に家まで送つて呉れ給へ。」

「驚いたなあ。」と香川は無邪氣に笑つて「然し病人の事だ、勘辨して送つて行つてやらう。」

二人はやをら床几を立てて静かに歩を運ぶのである。

「何時の間にか秋に成つて了つたねえ。」と群松は梢に騒ぐ鴉を見上げて言つた。

「風の音にぞ驚ろかれぬ……か、然し不忍池畔の敗荷の音を聴くのは何とも言はれん快い氣持だ。」

「句でも出来たかい。」

「久しくやらんと何うも駄目だテ。」香川は首を掉つたが「時に、吉川は此頃尋ねや爲んか。」

「過日一度来たが……」
 「而して何か君の身に關して立入つた事を話して爲なかつたかい。」
 此方は少時考へた後、「別に那樣事も無かつたが、立入つた話とは、何ういふのだ。」
 「否、聽かなければそれで可いがね……」
 「だけど氣に成るね。君は知つてるなら話して呉れ給へ。」
 「まわ、案じないでも可いよ。愚劣な事さ。」
 と香川は横を向いて了ふ。

七十五

家へ入るとお光が待構えて「何處へ行つておらしたのです。餘り手間が取れるから心配してゐました。」
 と言ふ。群松は莞爾しながら、
 「上野を散歩したのさ。おい！今日は珍しいものを拾つて来たよ。」
 「え、拾物？」

「然うだ。試に嘗て見ろ。」
 「眞逆紙入ぢやないでせうね。」
 「卑しい事を言つちや可かん……もつと大きな物だ。」
 「又犬の子なんぞ拾つて来たのぢやありませんか。」
 と言ふ聲を聴くや、香川は暗い處から「マツと首を突出し、
 『犬の子、犬の子、細君斯ういふ大きな犬の子ですよ。』
 『まわ！』とお光は喚び立て「香川さん。飛んでも無い失禮を申しました。」
 二人が座敷へ通る後から、お光は洋燈の用意をして極悪さうに其處へ入つた。
 群松は一人で面白さうに「何うだ、思惑ないものを拾つたらう？香川君はお前に侮辱されたと言つて酷く怒つてゐるよ。」
 「何うも申譯がございませんでした。毫しも知らなかつたものですから、お光は益す
 四ひ。
 「那樣事に謝る奴がおりますか、細君、貴方にも似合んぢやありませんか。抑も拾物
 だなんて……其方が餘程人を侮辱してゐるんだ。知らん貴方に罪は無し。」

「然うかも知らないけれど、紙入一件では大いに腹を見透されたな。」
 「それも君の言ひやうが悪うからさ。遠慮の無い處、萬一落ちてゐたら其を拾つて來ないとも限らんのだからな。」

「失敬千萬な！如何に窮しても……」

「解つたよ。是が拾物の復讐さ。」と香川は無暗に笑消して「時に細君、群松の病氣も快く成つて何より結構ですな。」

「はい、お蔭様で安心致しました。」

「然うでせう。而して又聞く處に依れば此頃は非常に勉強するんですつてね、彌上以て群松家萬歳だ。斯ういふ事に成ると、自然に好い迷が向いて來ますよ。」

立続けに言はれて、お光は周章しながら「其邊は何うでございませうかしら。」
 可怖々々良人の方を見ると、猶且莞爾しながら空嘯いてゐるので、彼女はやゝ意外に感じた。

「お案じなさるな。屹度好い事が有りますとも。」と香川は念を押して「ですから、僕等は貴方等に此際十分に言ふて置きますが。斯ういふ風にさへ爲て行けば、決して悲觀

する事は無い。又萬一か今後此家庭に何ういふ障礙が起るかも知れんが、那樣事にいたり、又氣を腐らしちや可かん。是は能く覺えてゐて下さいよ。」
 是を聴くと、今迄無言でゐた群松は偶と向直つて「君、それは何ういふ事なんだね。」

「別に……何でも無いが、唯御注意までに言ふんだ。」

「ふうむ。變だなあ。」

「變な事があるものか、轉ばぬ先の杖さ。ねえ細君。」

と言つたが、次の間に煙管を叩く音がしたので、

「おや、誰かおゐでますか。」

「母でございませう。」とお光は一寸と振返つた。

七十六

其翌日、群松は例の紹介状を持つて出懸けたが、夕方までかゝつて勢好く歸つて來たから、終日案じ暮したお光が早速様子を訊ねると、思つたよりは好い都合で、直に技師の上田氏と同道の上先方へ赴き、主人にも會つて全然話を取極めて來たとの事であ

つた。

主人は狭山惣平といふ當時知らぬ者も無い金満家で、それが金に明して別荘を建築するにつき、西洋館の装飾の一部を擔任して呉れといふのである。

「然うすると是から其別荘へ通入事に成るのですか。」とお光は訊いて見る。

「まあ當分の中は毎日通ふのだね。月給は甚いけれどそれでも車代には利るだらう。」

「何時までかゝるのです？」

「先づ一年といふものだが何の彼のと其以上に成るだらう。」

「へえ、驚いたわねえ。」

「何うせ金の有剰る人の道楽だ。」と群松は氣の入らぬ語調で言つたが「然し今日は弱つたよ。斯様見窄らしい風脈を爲て行つたものだから。」

「然うでせうとも！彌よと成れば服装でも拵えなければ可けませんね。」

「彌よどころか、明日からでも行かなけりや。」と考へて「彼の洋服でも有れば當分用は足りるのだけれど。」

お光は黙つてゐる。

「此上香川に相談するのも餘りだしな。おい、お母様に話した處で駄目か。」

「然うねえ。駄目らしうございますね。」

「そいつは困る。何とか工夫は無いだらうか。」

茫然相對してゐると、家の中は何時か薄暗く成つて、庭の向方の草場から淋しい秋風が吹いて来る。群松は嘆息して、

「爲方が無いか。」

「でも然う言つてはゐられないんでせう。」

「都合の着くまで何とか口實を拵えて延すのさ。其中には又分別が出来る。」

「だつて折角此處まで來たのですから。」とお光は一つ處を見詰めてゐたが「好うございます、妾が何うかしませう。」

「お前が？、其は可けない。」と此方は冠を掉つて「其をやり出すと又面倒に成るか、まあ、心配しずに置くさ。」

「少とも面倒な事は有りませんよ。其位の事は妾さへ足を運ぶ氣なら、今の間にだつて都合して來ますよ。」

「然し、僕はお前に此上那樣事で足を運ばせたく無いのだ。」
 「だつて外の事ぢや無し。構やしませんよ。何も貴様の名前を出してお金を借りやしません。」

「左に右僕の名譽ぢや無いからな。それよりも捨て、置いて呉れ。」

「那様子供見たやうな事を言ふものではありません。今度だけは妾に任せるのが可いわ。」とお光は一人で極めたが、偶と日が暮れたのに心着いて「まあ、御膳の支度も爲なかつた。」

七十七

秋風の別けても淋しい川沿に、射す燈火の影も薄い裏町を、洗晒した紺飛白に、是ばかりは降立の吾妻下駄の音も軽く、小走に入つて来た女が、唯或御神燈の格子戸を啓けて、

「御免なさい。」と訪れる。

「何方？」

甲走つた聲で應へた、十二三のお酌が出て来たが、

「何方？」

「まあ、花ちゃん！大きく成つたわねえ。」「何方？」と覗込んで「あらまあ！源江姉さん、お珍しいわね。」

お光は衝と内へ入つて、

「居るの？」

「えい。」

と小花は奥の襖を啓けると長火鉢の向方に貸本を讀んでゐたお俊といふ抱主が偶と顔を擡げたが、

「おや、お光さん。」

「久瀧。」とお光はベツタリ敷居の際に坐つて「何うも申譯の無い御無沙汰を致しました。」

「まあ……」と未だ驚きの消えぬ面色で「何うしたんだらう。此方へおいでなさいよ。眞實に思懸無しのね。」

「何だか久しぶりで敷居が高いやうな気が爲ますわ。」

「那樣事は何うでも可いぢやないか、此方へおいでッたらさ。」

お光はおつゝ膝を前めたが、其まゝ俯いて自分の服装ばかりを氣に爲る。

お俊は三十三、色の淺黒い、眼に險のある女だ。長羅宇の煙管に煙草を詰りながら、

「時に何うです、其後の景氣は？」

「御覽の通りよ。」

「だけど自分の物數寄だもの、それが又面白いんでせう。」

「然うね。」とお光は横を向く。

「まゝ確りお行りなさいよ。何も意地づくだから。」

「えい。」

「一度は苦勞を爲て見るのも可いでせう。だけど、以前は忘れたく無いものですわ。」

お光は然もこそといふ顔色で「然う斯込まれては辯解の爲やうが有りませんけれど、

是には種々理由が有るのよ。」

「理由は最初から有るのですとも。」とお俊は上眼で見たが「然し最う斯様事は廢しま

せう。一年経つても二年経つても、忘れずに訪ねて来て呉れるだけ、お前さんにも實

が有つたのだから。此上左や右言ふのは妾の方が野暮だわ。」

「段々痛く成るわね。」とお光は苦笑をする。

「だから最早言ひつて無し。是は眞面目ですが、群松さんは其後何う爲すつたの？」

「妾の此様子で解るでせう。姉さん心柄ですわね。堪忍して下さいよ。妾だつて彼の

時言はれた事は身に泌みてゐるけれど、今更何うも爲やうが無いんですもの……」

お俊は黙つて頷いた。

七十八

二人とも熟として顔を見合せてゐたが、お光はとつゝ耐兼ねて、

「姉さん、此方の景氣は何うなんです。」

「まゝ相變らずですよ。」と吸つけ煙草を出しながら「唯お前さんが居ないものだから

淺山さんが大しよげさ。」

「築地のですか。」

「何うせ彼の人も三枚目だけど、それでも當が無いと、餘り好い氣持が爲ないと見えるわね。」

「だけど最う諦めた頃でせう。」

「處が然うは行かないの！群松さんの群の字でも言つて御覽なさい。それこそ大變なんだから、餘程情いと見える。」

「だつて彼の方は最初から間違つてゐるのよ。淺山さんの奥さんと來たら、姉さんそれは美しい女！彼で浮氣を爲やうなんて、全く奥様冥利に盡さるわ。」

「ぢやあ猶且隣の糕林味噌かも知れないのね。けれどお客なんて者は其で持つてゐるのです。」

お光は火鉢の縁を撫でて意味も無い溜息を吐いた。

「其は然うとお光さん、今日は何か奢つて貰ひませうか。」

「幾何でも！だけど姉さん、妾はお金が無いわ。」とお光は忸怩して「久しぶりで來て斯様事を言ふのは眞實に耻かしいんですけれどね。姉さん、妾に少し貸して下さいな。」
「え、貸させうとも、お前さんの事なら……。」とお俊は常談らしく言ふ。

「眞實よ。思へば斯様事を言へた義理ぢや無いんですけれど、妾些と意地づくで爲なければ成らない事が有るんですから、助けると思つて都合して下さいな。」
「出来る事なら其は何うでも爲るけれど、一體何の位なの？」
「十圓ばかり。」

「十圓。」と繰返して「其ツばかりで好いのから。」

「今の身では意地も下落しました。え、十圓あれば昔の静江の意地は立つのです。」

「あ、素人にはなりたくないもんだ。」とお俊は笑止らしい面色をする。

「是が成行です。」

お俊は黙つて身を振向け、用笥から十圓札を二枚出して、手疾く紙に包み、

「些と吝嗇かも知れないけれど、是で我慢して下さいよ。」

「濟みません。」と此方は一寸戴いたもの、有紫に直にも納めかねたか膝の上へ置いたまゝ、「何れ近い中に屹とお返し申します。」

お俊は煙草を喫みながら、熟々其可憐しい姿を眺めた揚句、思切つて、吹殻をポンと叩くと、

「静ちゃん。」

「え。」

「お前さん怒るか知れないけれど、妾は斯うして差向ひでゐると、何だか悲しく成つて来るのですよ。」

「餘り意氣地が無いからですか。」

「まあ然らね。怒つちや可けないよ。」

「何の！怒る張合も今ではありませんわ。」

とお光は淋しく微笑んだ。

七十九

「何故那樣捨鉢な事を言ふんだらう？」とお俊は目を丸くした。

「でも怒つたりなんぞする間が有れば、外に種々苦勞を爲なければならぬのですもの。」

「可厭に成るぢやないか。然う今から巻けて了つては、何時まで呑氣であるのも困る

けれど、僅一年や二年で急に所帯染みるのは餘り見つとも好く無いものです。」と時々様子を窺ひながら「一體群松さんは何を爲てゐるの？」

「彼の人は美術家ですよ。」とお光は顔を揚げる。

「美術家といふものは氣樂な商賣なんぞでせう。」

「え、氣樂と言へば氣樂のやうなものですけれど……」

「何だか大層お金に成るのださうですね。」

「否、人に依つたら何うですか、家なんぞは何程も取れやしないんです。」

「其代り資本が少もかゝらないのなもの。何でも他の話によると、美術家なんて者は大變贅澤ださうだから、好いお金を取つたつて片端からドシ／＼無駄使ひを爲て了んでせう。」

「まあ何方にしても貧乏に變りは無いのですから、體裁の好い方に爲て置ませう。」とお光は冷た茶を飲んだ。

「だから爲る事も言ふ事も皆物數奇で固まつてゐたのだわ。宛然役者が世話場を演つてるやうに、テモ味氣無い浮世ぢやなわか何か言つて、合方入で其日々々が送れば

世の中は氣樂なものだね。」

「常談ぢやありませんよ。今時那樣馬鹿馬鹿しい人間が有るものですか。洒落半分に此家へお金を借りに来る程、妾は氣が違やしませんよ。」

「其話は別ですがね。兎に角困るにしろさ妾は屹度然ういふ處も有るんだらうと思つてるの。」と言つてお俊は火鉢の縁へ自墮落に脛を突き「けれどね、お前さんも最う好い加減に目を覺したら何う？」

「覺すつて……妾別に眠てはゐません。」

「自分ぢや何ふ思ふか知らないけれど、他が見ると今が坐睡の最中だわ。それは氣粉れの世話女房も一度はやつて見るが可からうが、何うせ長く續かないに極つてゐるんだから、ね、何時か一度は目を覺す時が来るんです。」

お光はすいすい目に配と相手を見据えて、

「姉さん、妾の考は全然違ひますよ。妾が今が覺めてゐる時だと思ふの！」

「飛んでも無い。那樣夢中でのながら。」とお俊は失笑して「まの能く考へて御覽なさい。お前さんだつて利口な人だから何れ氣の着くには違ひないが、其着きやうが餘り

遅いと、最う効が無いからね。」

お光は強ても言争はなかつたが、腹の中では、自分の立場を毫しも疑はなかつた。

八十

机の角に置洋燈を載せて、何時買つて來たのだから塵埃だらけな大版の西洋雜誌を疊の上へ押擴げ、彼方此方と挿繪を眺めてゐた群松は、人の足音に偶と顔を擡げた。入つて來たのは母親のお新である。

「今夜は忙しいのですかね。」

「何有。」と彼は居住を直して少時黙つてゐたが

「御用なんですか。」

「些とお前さんに話したい事が有るので。」

と差向に小ぢんまりと坐る。

「改まつて何ですか。」

「然う急いで話が出来ませんがね。」とお新は一つ處で膝を動かさし、それから物珍し

さうに四邊を見ながら『お光は何處へ行きましたか？』
 『知己の處へ行くと言つて出たのです。貴方にも其通りお断りを爲てゐたぢやありませんか。』

『それは解つてゐるがね……其知己といふのは何ういふ。』

『其處までは知りません。』と群松はポリポリ頭を掻いた。

『然うですかね。妾は又お前と打合せて出かけたのかと思ひましたよ。では自分の用事だつたのかい。』

と勝手に頷く。此方は何とも知らず小面倒臭く成つて、

『否、私は別に與知らんのだが、少し家の用も有るのでせう。處で其が何うか爲たのですか。』

『然ういふ譯では無いがね。』

『で、今有仰つたお話といふのは一體何です？』

お新はやゝ躊躇してゐたが、旋て重口で、

『お前のやうに然う疊かけては、誠に話が爲悪くつて困るわね。何うせ老人の相談事

だから、熟くりと聽いて呉れなければ口が解れません。』

『へえ！ぢやあ其通り熟くり聽きませう。』

と雑誌を閉ぢると、紙上に積つた埃塵がパツと立つ。

お新は面も背けずに『實は疾から相談せうと思つてはゐただけれど、斯様事は餘り香しくも無いから、つい今日まで延々に成つて了ひましたのでね。』

其の煙を矢鱈に吹きながら、群松は眉を顰めて母を見詰める。

『他の事とは違つて、妾の口から言ふと……其世間に能くゐる嫁と姑の紛擾と同一に見られるのが辛いのですが……妾のは決して誰が悪いといふのでは無いから、其處はお前も勘違を爲ないやうに……頼むよ。』

『はあ。』と氣の抜けた返事を爲て『それから先は何う成るのです？』

『畢竟だね。妾は此家といふものを考へての上で相談するのです。何うだらう、今の此有様では逆も先途の望が有りさうも無いと思はれるがね。』

『は、あ。先途の望？それは何ういふ意味のですか。』と群松は漸く口から其を離した。』

「お前だつて何時までも斯様有様である氣ではありませんまい。」とお新は是だけ言つて又相手の氣色を窺ふ。

「無論ですな。それは十年経てば十歳だけ年を取るし、此まゝで居やうと言つても然ら自由には成りませんから。」

「年齢の事は聞かないでも解つてゐますがそれよりか第一に……」と言つて適當の言葉が見つからないのを獨して悶しがつたが「其何さ、えゝと生活向なり又名前なりがね。」

「ハ、ア成程然うですか。是も仰有るが物は有りません。私だつて名前は掲げたいし出来る事なら御殿のやうな家へ住んでも見たい。」

「然うだらう。其處だよ。」

「但し其は思ふだけです。必ずしも然ら成るとは信じないし、又其爲に無理な事を爲る了筋も有りません。」と群松は自分の膝の邊を見詰めた。

「思ふだけでも可い。それで澤山です。お前もまゝ其意で此頃では大變勉強して呉れるやうだから妾は心の中で大安心してゐます。けれども折角勉強して呉れても、嫁いで呉れても、其が何の役に立たないやうに成つたらば誠に残念ぢやないか。」

「何をお母様充らん事を仰有るんです。世の中に飯を食はん人間の無い如く、役に立たない勉強は有りやしません。えゝ！勉強といふものは役に立ちます。屹度立つんです。那樣矛盾した心配を爲すつちや可けませんよ。」

お新は慌てた様子で「否、然う理屈詰めに……お前のやうに言つては話に成らないやね。然らういふものだらうけれど、能く譬喩にも言ふぢやないか、椽の下力持だとか、犬骨折つて鷹に取られるとか。」

「可怪しいですね。ぢや私誰かに食物にでも爲れてゐると仰有るんですか。」

「先づ然ら言ふ處も有る。」

群松は突然席を前めて「伺ひませう。那樣曖昧な事で無く、何も斯も打明けて言つて戴きませう。」

「あゝ、言ひますとも！」と答へたが、斯う成ると今度はお新の方が萎む。

「お話の眼目は大概解りました。解りながら今迄は全く貴方のお言葉を茶にしてゐましたから、老人を馬鹿に爲ると立腹なすつたかも知れませんが、實は自分で自分の感情を撓してゐたんです。けれど考へればそれも卑怯ですからね。何でも伺ひませう。而してお互に思ふまゝを言合つて氣が霽れば其で満足ですもの。」

「一人しか無い親の子だからね。」

「然うですとも！」と此方は無邪氣に頷いたが「先刻嫁と姑の事だとか仰有つたですね。お母様、お光が貴方に對して何か不都合でも働きましたか。」

「決して那樣のではありません。妾とお光の間には氣まつい事は有りませんよ。」

お新は瘦せた掌で徐に額を押へた。

八十二

「無ければ何うしたのです。可怪いな。」

「其處が相談だわね。」とお新は顔を突出して「今も言入通り、妾とお光との間には何も曰くは無いのだよ。又萬々一有るとした處で、那樣内輪の紛擾ならば妾は何とも言

やしない。老先の短い體だものぞ、焦燥した揚句お前には悪く思はれ、世間からは憎まれたくは無いらね。」

「然し何も其程我慢を爲さるにも及ばんでせう。貴方のお氣に入らぬ處はドシ／＼仰有つて下さい。私から酷しく叱つて遣ります。」

寄つく鼻を突放された態で、お新は大きに當惑したが、旋て空咳を爲て、

「だから然うでは無いのです。唯妾は家の爲と、お前の行末を思ふから、斯うして苦い事を口に出すのよ。」

「あゝ、それも陳腐だ。」と群松は我にもあらず呟いたが「一體何が……否何うして爲に成らんのです？」

「お前さん能う考へて御覽。此頃の家の有様を！眞實に情無いぢやないか。」

「成程、私も常に其事は考へてゐます。然しそれは皆私の罪です。私が倒れないからして、群松の家は斯様に零落して了つたのです。」

「何有、元來莫大な財産が有つたといふのでは無いら、零落したつてそれを悔む事は有りませんが。金吾！妾は過ぎた事を左や右言ふのぢや無い。是から先の家の爲を

思つて……實は心を鬼にして談合するのだよ。無慈悲だと怨むか知れないけれど、何うだらう、お光と離別れる譯には行くまいか。』

『え?!』と有繋に目を皿にしたが、旋て努めて冷静に『離別れなければ成らん理由が有れば直に離別れても宜敷いが、お母様は何故那樣事を仰有るんですか。』

『だから今迄口を酸くして言つてるぢやないか。家の爲に……』

『何程其だけ仰有つても、其理由が極めて不明瞭なんですもの。貴方の氣にも背かず私も飽いたぢやなし、別に彼が居る爲に無駄な金銭を遣ふのも無い。而て見れば全然不爲といふ理由は無いぢやありませんか、それとも他に何うしても離別しなければ濟まん事が有るのでですか。』

『然うお前が言ふなら妾も言つて聞かせます。』とお新は汗を拭きながら『お前は現在親類や、世の中から見捨てられてゐるぢやないか。それが解らないかい。』

『親類?世の中?』と一々顔を覗いて息が込あげるやうに言つた群松は、とうく物の弾けるやうな甲高い聲で笑つた『馬鹿馬鹿しい。それが理由なんですか。』

『馬鹿々々しいとは。』

『構はんぢやありませんか、見捨てる奴は見捨てるが可い。自體先方で然うしなくつても此方から見捨ててゐるのだ。今更那樣充らん事で騒ぐには當らんでせう。まあ貴方も黙つて最う暫時辛抱して下さい。生意氣な事を言ふやうですが、何時まで斯んなみじめな目に逢はせては置けませんよ。お母様私は二三日中に或處へ通勤するやうに成りました。』

『其事は知つてゐるよ。』

『ですから、まあ御安心なすつて下さい。人は何處までも一人で立つて行けるのが價値なんだ。』とフイと立上つて伸を爲ながら

『負惜みぢや有りませぬけれど。』

氣を吞まれたお新の前を大跨に歩いて、彼は縁端へ出たのである。

八十三

セルの單衣に一樂の平常羽織を引被けた淺山は無造作に客間へ出て来て、

『ヤア、大きに御待たせしました。』と座布団の上へ無圖と座つた。

客は吉川である。

「御多忙の處を飛んだ御邪魔に出まして。」

と火入の中へ突挿した其の吸壳を氣にして灰吹へ入れながら「若し御迷惑でしたら近日改めて出ましても宜敷いので……」

「否々最う用は済んだのです。御遠慮無くお話し下さい。」と庭の方を見て「三日以來急に寒く成りましたな。」

「然様！」

「何うです、近頃は面白い種が有りますか。」

「餘り變つた話も無いやうです。」と吉川は肩を怒らして又其に火を點けた。

「太平無事で無くつて、沈滞無事ですか。何處も同じ秋の夕暮だアハハハ。」

「然し貴方などは那樣に悲觀なさる事は無いさうです。」

「僕がイヤ其は大間違だ。唯斯うして茫然と空氣を呼吸するといふのみの事です。先づ當分は此疲勞と而して不安から救はれる譯には行きませぬ。」

「然うです。」と吉川は好い加減な返事を爲たが「時に今日は極其……私用で伺つた

ので。」

「ハ、ア私用とは？」

「先日御留守へ出しまして、奥様にお目に懸りました節、實は御相談に與つた件なのです。」

「ハ、ア。」と又訝しさに「然うでしたか。生憎又今日は家内の奴が不在で、最う追

つけ返る筈ですが。」

「否、奥様よりも今日は貴方に申しあげ度いのです。」

「僕で解る事でしたら伺つて置ませう。一體何を彼女がお話し致したのですか。」

「群松の事に就きまして、種々御相談を受けたのです。」と吉川は其の灰を拂きながら「ザリ」と席を勧めた。

「成程。然う言へば思出しました。君は群松と御懇意ださうで。」

「はい、竹馬の友でございます。」

「如何様。」と領して「家内も疾から群松の事では心配して居つたから、幸ひ貴方を見かけて何かお頼みしたのでせう。」

「奥様は今の中に何うにかして彼の窮境から救つてやりたいといふので、非常に氣を揉んで被在いたしました。」

「フム」。其事は疾から言暮して居るですよ。イヤ群松の事に就いては僕も全く嘆息の外は無いです。それは此方も道學先生ぢや無いからして、彼が身分相當の放蕩を爲る位な事を左や右叱りや爲んが、彼様いふ始末に成つては困るですから。第一彼の將來が思やられる。」と苦い顔をして、

「將來どころか、現在も非常に窮して居るといふぢやありませんか。」

其から擦つた揉んだの談議を、吉川は馬鹿馬鹿しいと思ひながら、神妙に聴いてゐなければ成らぬのであつた。

八十四

一通話が済むと、吉川は徐に顔を揚げて

「畢竟群松を彼のまゝにしては置かれんと仰有るのですな。」

「無論です。」と一際強い語調で「僕は最初から然ら言ふてゐるのです。處が其叱責を

聴くのが苦しくて、とうとう此家へ足踏も爲んやうに成つた。御承知の如く長い間世話になつた恩義を………忘れたといふ譯でも有るまいが、自然那樣有様に立いたつたです。處が家内は昔からの關係も有るので蔭に成り日向に成り庇護立をする。先日も何か僕に秘して群松の宅へ参つたさうだ。」

「其時私も居合せたので、それから御懇意に成つたのですが………就ては。」と吉川は忙しく瞬をして「奥様は、彼の群松の妻をですな！放逐するやうに、私共に骨を折つて呉れとの御依頼なんです。」

故意に一句々に力を籠めて、昵と相手の素振を窺つた。淺山は眩しさに頻と髀を捻つて見たが、

「成程、まゐ然うでも爲たら申譯も立つし又彼の爲にも利益でせう。左に右彼様いふ者が附いて居つては唯一人として同情する者が無い。貴方達も群松の爲に計つて下さるなら何分とも其邊をお願します。家内の言ふた通り、僕からも改めて御依頼するですから。」

「は。」「と意味有り氣に生返事を爲る。

「僕も決して群松を捨てたくは無いのだ。改心の證據を見せて呉れたら、將來悪いやうには爲ん。」

「解りました。貴方の其お言葉を伺はんでも、私は大いに其事で骨を折る意で居つたのです。」

「それが友人の義務ですな。」

「え、！處が、其後種々考へて見ました結果、何うも那樣事に關係するのは馬鹿々々しいやうな氣が爲ましてね。私今日は實はお断りに來たのです。」

「断りに！」と淺山は喫驚して「何故断るのですか。」

「全く情に於て忍びませんから……考へれば生木を裂くのですもの、斯様慘酷な事は有りませんや。」

「是は又意外な説を伺ふものだ。貴方達が那樣没常識な事を言はうとは！實に呆れるの外は無。」

「お呆れに成つても何うも爲方が無いのです。私のみならず、群松の友人は殘らず連合して、今のまゝで盛立て、やらうといふ事に極めました。若一他から迫害されるや

うなら、意地づくでも尻押しを爲ると力瘤を入れる者すら有る位なので。」

「怪しからん。誰が那樣亂暴な事を。」と淺山は眞赤に成つたが、旋て氣が着いたか冷かに笑つて「群松の友達なら何れも放蕩無頼な者共でせう、眞逆貴方が其に加はつて居られる筈も無からう。」

吉川は愕然して「え、私は今の處其處まで踏込んで居ませんが、左に右此方の御頼だけはお断りを爲して置きます。少と馬鹿氣てゐますからね。」

八十五

「何ですと？聞捨てに成らん事を仰有る。」と淺山は斜に見下して「馬鹿々々しいとは、彌よ以て意外だ。」

「否、誤解なすつちや困る。私は其事が馬鹿馬鹿しいと言つたのでは無いので、只兄弟同様にして居る群松や、多くの友人に怨まれるのが辛いですからな。」

「ハ、ア、其爲に忠告が出來ん！ハ、ア其が眞の友情といふものです。那樣親友を持つて居る群松は幸だ。」

と笑ふ顔を吉川は冷に見返して、
「其忠告を口實に何かの復讐を爲やうと考へる先輩も有るとか言ふですから。」
淺山は慄然とした。

「萬々一私が其手先に使はれるなぞと誤解された日には、それこそ好い面の皮ぢやありませんか。」

「一寸、失禮ではあるが、お話の様子では僕に後暗い事でも有ると言れるんですか。」
「私は信じないが、然ういふ風説を耳に爲ました。」

「怪しからん事だ！」と威猛高に「大方群松が言觸すんだらう。苦紛れに人を傷けて自己の非を遂げやうとする。實に憎むべき奴です。」

「或は然うかも知れんですが。」と吉川は案外澄したもので「然し何程苦紛れでも、全然形跡も無い事を言觸しは爲ないでせう。」

「否無根だ、斷じて僕は言張る。」

「然うですか。では私が聞いた事、及び其によつて探得た處を世の中に發表してもお差支無いですな。」

「え？發表？何故那樣無法な事を爲さるか、現に僕の口から無根だといふのに。」

「でも丁と種が上つて居るでももの。單に貴方のお言葉のみを以て此種を棄つて了ふ譯には行きません。」

淺山は火のやうに成つて「耻辱です。一體君は如何なる怨が有つて、僕を苦しめるのですか。」

「別に怨も無いですが、斯ういふ事實が有る以上、世間に發表して衆人の反省を促すのが私共の職分です。」

「新聞に……其等の事を掲載するといふのですか。」

「或は出すかも知れませんが。」と吉川は悠然と煙草を煙らす。

「心外とも何とも言ひやうが無い。では貴方の聞いたり探つたり爲れた事を一々伺はうではありませんか。而うして僕は直に辯解して見せる。其なら可いでせう。さ、其事實といふのを話して下さい。」

「今はお話し申す事が出来ません。」

「何故です？」

「未だ警察中の事も有るですから。浅山さん、人の秘密といふものは妙です。或一つを手繰つて行くと、それから夫へ種々な事を発見しますよ。」

『では、何時話して下さるか。』と浅山の聲は戦いてゐる。

『解りません。私が口で申さんでも、其中文字で御読みなさる事が有りませう。』

『残酷ですなあ。ちや、何うしても僕の名譽を傷けやうといふのですね。』

『けれど其が事實無根なら、如何に書立てやうが貴方の御名譽に關らん筈です。立派に證據を擧げてお取消なされば宜敷いぢやありませんか。』
落着き拂つた其態を見詰めて、浅山は只切齒するのみ。

八十六

相對なら何うでも辯解は出来るが、世の中へ發表された文字は何程辯解しても白紙には成らぬ。取消は耻辱の上塗、徒に世間の注意を促すに過ぎぬと思へば、浅山の胸の中は裏返るやうだが、宿敵に首根ツ子を掴まれた以上、怒らうが怒まらうが其は結局問搔損である。

話を爲るにも人にこそ依れで、斯様者に内兜を見透されたのを、彼は足踏して悔んだもの、それも今更何う成るものぢや無い。浅山は落膽して首垂れたが、

『然ういふ貴方のお考なら、何うも致方が無い。御随意に爲すつて下さる。』

『勿論です。私の手に有る以上は、之を出さうと出すまいと、私の随意ですから。』

と吉川は意味有氣に一瞥した。

『え、出さうと出すまいと?』

『然うですとも。』

浅山は忽ち一道の光明を認めて、思はず體を乗出し、

『吉川さん、貴方の御自由になるのなら、何とか穩便の所置を取つて戴く譯には行かんでせうか。元來敵同士といふでは無し、又貴方に爲た處で、好んで他人の秘密を發くにも當らんでせうから。』

『それは私も人間ですもの。好んで不人情な事は爲たくありませんが、然し事實と認めめた事はね……然うで無いと私の職務を疎に爲る譯で。』

『其事は解つてゐますが、其處が所謂御相談です。斯うして御懸念に爲るのも畢竟

は斯様場合に助けて戴きたいからだ。ねえ、交際といふものは然うでせう？、其代り僕も將來貴方の爲には貶度其だけの好意に酬みますよ。」

「御尤です。」と吉川は軽く頷いて「然う言はれると私のお交際として貴方を苦しめるのはお氣の毒ですが。と言つて既に社中の或者は此種のがつた事を知つても居るですし、是までに爲るには二三の人を使つて金を懸けてもある。それを今私の自由で引下げた日には、何か……貴方に買収されて一人で好い事を爲てゐるやうに邪推する者も有りませう。」

「だから君！」と淺山は大きな聲で言つたが、忽ち顔を差寄せて「買収すれば可いでせう。」

「誰を？」

「皆を！其に關係した人達を買収すれば済むんでせう。」

「然うですな……」

「例は何程も有るぢや無いですか、何も其を發表して見た處で、實際社會に利益を與へるといふのでは無し。畢竟僕が金を出して僕自身の始末をつけるんだ。其が別に悪

い事でも無いでせう。」

「然様。」

「貴方と僕の中だ。其處は一つ目を瞑つて下さらんか。僕も少とは知られた人間だから、決して御迷惑は懸けん。」

其の吸口を摘みながら、吉川は目を据えてゐる。

八十七

辭し去る吉川を玄關先まで見送り、快々として書齋へ入つた淺山は、兩手に頭を押へたまゝ崩れるやうに机の前へ座つた。

「何といふ馬鹿な目に逢つたのだらう。」

彼は自分ながら愛想が盡きたが、然ればとて他に爲やうも無いので、

「まあ往生して食物に成るのかな。」

忌々しさに吐く時、玄關に腕車の音がして、旋て家の中が賑に成つたと思ふと、小走に奥へ来て、颯と襖を啓けたのは亮子である。

「唯今！」

浅山は一寸振返つて見たばかり、一人で佛然としてゐる。

「何うか爲すつたの。」と此方は身を横にして室の中へ入りこま、「可厭に陰氣ぢやありませんか。」

「其咎だ。」と突慳食に言ふ。

「何が咎です？ 瀧に障つた事でも有るのですか。」

「那樣事は聞かんでも可い。」

亮子は曠着のまゝ、其處に座つて「へえ、可怪しいわね。」

「黙つて彼方へ行け。歸り勿々何だ！ ギャン／＼喋り立て、一體お前は口が多から可かん。」

「だつて妾、未だ三言か四言しか喋らないぢやありませんか。」

「煩い。貴様の一言は十言に向うんだ。」

「まゐ散々ね。」

とや、暫時呆れてゐたが、旋て衝と立つて室を出やうとするので

「おい／＼。肝心の用は何うしたんだ。」

「ですから今歸りました。」

「返事を言へ、返事を、小供の使ではあるまいし。」

「だつて其を言はうとすれば煩いと呵られるんですもの。」

「用事と無駄口とは違ふよ。肝心の事は聞かぬけりや成らんから。」と浅山は焦燥する。

「承知しましたつて。」

「承知した？ 唯それだけか。」

「其から先を言ふとお煩いでせうから、妾は申しません。何うせ一言が十言なんです。口へ出さないでも貴方には解つてゐるでせう。」

とボン／＼言つて絹手巾で軽く柱を叩いてゐる。浅山は苦笑をしながら、

「其が煩いと言ふんだ、まゐ／＼何でも可いから話しなさい。」

「廢しませうよ。突然怒鳴りつけられて、妾だつて餘り面白くは有りませんもの。」

「イヤ、怒鳴つたのは俺が悪い、少し不愉快な事が有つたので、大きに癩癩を起してゐた處なのだ。然し最う落着いたよ。狭山は何と言つたか其話の片をつけて呉れ。」

亮子は氣乗の爲ない語調で「承知は爲ましたが、何れ委しい事は重役とも打合せて此方から御返事に出ますといふ事でした。」
と手巾を荷厄介に爲ながら「狭山さんは直に何處かへ出かけたものですから、奥さんと今迄お喋りを爲てゐました。成程考へると妾は口が多い方ね。」
「言はん事ぢや無い。だが何を然らう長々と喋つてゐられるんだらう。能く話題が盡きんな。」

「話題？そりや盡きませんとも。」

「何れ他人の蔭口でもさくのだらう。」

「え、他人の言へば、貴方の言ひますよ。」

「俺の？是は怪しからん。」

「貴方の悪口を除けば、妾は眞實は無口に成りますよ。」

八十八

淺山は爲らう事無しに笑つて聞流したが、嘆息を吐いて「わ、呑氣なものだ。お前のや

うな人間は長命が出来る。」

「然うでせうか、貴方の目には呑氣に見えますか。」

「細君を知る事亭主に如かず、呑氣だとも全くだよ。お前は留守に何が有つたか知りやしません。」

「夫は誰だつて知りやしませんまい。」と亮子は再び火鉢の前へ戻つて「何か事が起つたのですか。」

「わ、」と使無い顔を爲る。

「へえ、お隣の犬が鶏でも捕つて行つたんですか。」

「え？馬鹿な、全然話に成らん。だから情無いと言ふんだ。」

「だつて寝耳に水ですもの。一體何うしたんですよ。暇々言はずに理由を話して下さいな。」

「吉川ね。お前の知つてゐる吉川といふ男が來ましたよ。」と淺山はグンナリして上眼を使ふ。

「それが何うしたの？貴方にお目に懸りたいと疾から言つて居たんですから、來たつ

て別に不思議は有りませぬ。」

「餘り無くも無いさ。」と腕組を爲て考込んだが「お前は又何故彼様者に餘計な事を頼んだのか。世間には善人ばかり居や爲ないから、少と物事に絡括りをして、人を撰擇して呉れにや却つて飛んでも無い目に逢ふよ。」

亮子は呆返つて、暫時は目を睜つてゐたが、

「吉川さんが何うしたんです。妾は決して彼の人に……那樣貴方に御迷惑を懸けるやうな事を話した覺はございませぬわ。」

「何だと。是程迷惑を懸けて置きながら、實にお前は馬鹿だ。」

然無きだに忿懣してゐた端だから淺山は、一時に嚇として怒鳴りつけた。斯う成ると無邪氣な應待が一團に痲痺に障るのだ。亮子も初の中こそ半分は茶にしてかゝつてゐたのだが、段々話が捲れて來るにつれ、今度は眞剣に可怖く成つた。

「貴方、妾が悪かつたら謝罪ります。全く理由を知らないんですからね。吉川さんが……何を言ひました？」

「強請に來たんだ。怪しからん！」

「強請?! 何をぞです。」

「俺をだ。群松の事を種にして、金を出せと言ふのだ。」

呆るゝ事半餉ばかりといふ様で、此方は良人を見詰めてゐたが、

「それから先は何うしたのです？」

「爲方が無い、不運と稀らめて金を與る約束したんだ。」

「與らなければ何うするのでせう。」

「名譽を傷けられるのみさ。」

「でも那樣理屈が有りますか。ねえ、強請られる！」

「有らうが無からうが。」

急込んで火鉢の縁を叩く機に、火箸が二本筋斗打つて撥返ると、其處邊一面パツと灰神樂。

八十九

群松は毎朝の七時に宅を出て、點燈頃にはアタクと歸つて來る。で、門口の敷居

を跨ぐと、最早精も根も盡果てたやうにドクリと掛端に腰を懸け、兩手を洋服の膝に突かつたまゝ、先づ發と息を吐いたものだ。足勞れたのと腹が空いたので目が眩ふと言ふ。それから火鉢の傍へ來ると、お光が怡々して膳に被せた布巾を取る。苦しい中でも種々心配を爲て、好物な肴が出てゐるので、群松は子供の如く嬉しがらる。

食事が済んでも直には坐を立たず、何か彼にか無駄話に時間を費し、何程湯に行けと勤めても憶切がつてゐる中に、とうとう床の中に潜込んで前後不覺に寝込んで彌ふ。斯様懸梅に意氣地が無いのも病氣揚句の所爲で、馴れるにつけ次第に氣も確りして來れば、血色も見違へる程好く、今では肉附も以前より岩墨に成つた。

「貴方！ 金持の立派なお邸で仕事を爲て被在たら斯様汚い中へ歸つて來るのは可厭でせう？」

と或時お光が冗談半分に訊くと、

「猶且然うで無いよ。」と群松は笑を含んで

「何程金時給の籠に伺はれて、有餘る程餅をわてがはれても、鳥は野山を戀しがるからねえ。況して僕などは職人だ。義理も人情も、趣味も何にも無い金持共が、愚に

もつかん話を爲る座敷の裝飾を施すべく雇はれてゐる。體の好い左官さ、建具屋さ、いくら骨を折つて拵へた處で、自身が片時其中に住んで見たいと思ひは爲ない。それよりも濕氣臭い此家で脹を枕にしてゐる方が氣隨だよ。」

としんみりした聲で語つた。

昨日今日と思ふうちに、最早半月ばかり過ぎて、飛ぶに懶氣な蠅が、椽の日向に集る頃と成つた。例によつて群松は朝早くから目白臺の狭山の邸へ出かけた。江戸川の終點で電車を降り、山手へ小十町行つた處に、遠くからも目につく藪藪して森を庭に取込んで、土塀の奥床しい角邸がそれである。通用門を潜つて、内玄關から技師の詰所へ入つたが、此處は納戸の次の間を臨時に使用してゐるので、外廊の出来上つたと共に人の出入も少く成つたから、室の中も段々片附けられ、今では壁に貼つけられた此邸の圖と、製圖機械や種々の帳簿を載せた大卓子と、古い椅子が三脚置いてあるばかり。尤も此室だけは未だ墨を入れては無い。

群松は室へ入りしなに納戸を覗くと、其處には卜部といふ人の好い老人が一人しよんぼりと煙草を喫んでゐる。

『お早う。』

『ヤ、お早うございます。』と老人は煙管を口から離して『毎日御苦勞様です。』

群松は手疾く上着を脱いで壁に懸け、カーキ色のダブ〜した仕事を引被けてゐる折から、老人は茶を汲んで持つて来たが、

『お天氣で結構ですな。』

『え、』と此方は軽く會釋して茶碗を取る。

『然しお天氣でも滅切り寒う成りましたわい。』とゴホ〜咳嗽をして『あ、此からな、

上田さんからお傳言か有りました。今日は出がけに御本宅の方へ廻るで、事によつたら午過に行くかも知れんと……』

群松は黙つて打領いた。

九十

朝の中に一働。今日は時候の所爲か無暗に氣乗が爲て、群松は殆ど煙草休も爲なかつたのである。

で、午餐に詰所に歸ると、卜部老人が待構へた。といふ顔をして、ソ〜納戸からやつて来た。

『ヤ、お足勞でせうな。』と早速差向ひに椅子へ腰を下したもので。

『何有、那樣に躰を使ふ仕事ぢやありませんから。』と群松は揉苦茶な手巾で額を拭いて、それから手提ぐ辨當の包を解いた。

『其代り頭が疲勞れる！』と老人は卓の上に頬杖を突いて、不思議な程熱心に相手を打目成る。

『まあ然うですな。』

『然し面白い御職業だ。私は何時も然う思ふ。同じ職でも在來の大工や左官と違つて貴方は仕事に面白味が有りますよ。』

群松は一寸と可厭な顔を爲たが、直に笑ひ紛らして、大口に飯を頬張つた。

『何でも然うだが、此時勢といふものに後れては可かん。』と前人未發の大真理でも説明したやうな態度で『世の中の事は總て然うだ。』

『然うですかなわ。』と出來合の返辭を爲る。

「全くですぞ。私などは御覽の通り、今から見れば時代の違ふ天保老爺ですが、是でも腹……は此腹中の精神といふ奴は、未だく老老れた意ぢや無いのです。」

何を言ふのだらうと、群松は噴飯しさうに成る。

「其處が人間の氣の持かたさ。失禮ながら、貴方も油断を爲てゐると直に置いてけ堀に爲れますぞ、それから氣が着いて追着かうと焦慮つても無駄だ。」

「ぢやあ是から油断しないやうに一生命勉強しませう。」

「其處です。一に勉強、二に勉強、三も四も五も六も引括めて勉強だ。」

と濕氣を含んだ眼で睨と見詰めるのが何と無く底氣味悪い。而して少時すると、

「然し貴方は好い御職業を持つておゐるでござる。」

「處が自分では餘り好いとも感じません。」と群松はアルミニュームの辨當を疊んで、紫色メレンスの風呂敷でキツナリと包ひのだ。

「尤も誰にしる、自分で自分の仕事に満足は爲ないが、然ういふ中にも他には言はれん樂みが有るテ。」

「まあ其邊でせうな。」

「其樂みが又得難い。」と老人は頻に首を掉つて自身の言葉を味ふらしかつたが、突然例の濕んだ眼を睨き「あゝ私も貴方のやうな仕事を學んで置けば可かつた。」

群松は此時幸ひ其に火を點けてゐたので、其まゝ聞かぬ風で窓の方へ歩出した。

「學んで置けば可かつた！」と思入つた語調で繰返し「だが今に成つては最う何も彼も遅時だ。」

「六十の手習といふ事も有りますよ。」

群松は調戲ひに語を懸けたけれど、今度は老人の方が聞かぬ風をして、狐鼠々と納戸へ歸つて行くのだ。

九十一

群松はノツソリ戸外へ出た。居ても起つても氣持の好い秋で、刷毛で引いたやうな白雲の切目から鮮な青空が透いて見える。庭の木立は未だ緑の光澤を失はぬが、梢の戦下葉の葉すれは最う何處やらしんみりした氣色が爲て、向方の築山の蔭に植木屋の高話をする聲が折々訖しく聞えるばかり、邸内の晝は限無く淋し。

其清い空気を力一杯吸込んで、スーッと静かに吐くと、胸に詰つてゐる種々な俗事が忽ち消失して、頭が軽く成る。

「弱い、力の無い此生にも猶且前途の光がある。恰度秋の日のやうな……」
取止りのつかぬ事を吐いたが、旋て大きく手を振り廻しつゝ、彼は欣然として西洋室の中へ入つた。

午後の仕事は左右に功程の行かぬものであるが、それでも努めて働いた。約半時間も過ぎたであらう。庭の方で無遠慮な話聲が爲たが、群松は別に氣にも止めず手を動してゐると、今度は廊下に小刻な足音がして、慌しく入つて来たのは技師の上川氏であつた。

「ヤ、失敬々々。」とチヨコマカ會釋して「今日は本宅の方へ行つたものだから。」

「其事は卜部さんから聴きました。」と群松は片手で後頭部を押へたまゝ、「今日に態々おいでに成らんでも可かつたのでせう。」

「處がね！」と顔を突き出し「君！弱つたよ。大將が檢分に來るといふぢやないか、爲方無しに其御案内さ。」

「狭山さんが見えたのですか。」

「あゝ、自慢に客迄引張つて来たから遣り切れん。今日本室の方も見てゐるから、追つけ此處へも御來臨だ。其意でゐてくれ給へ。」

「承知しました。」

「ぢや頼みますよ。」と上田は兩腕を曲げて脇の下へつけたまゝ、妙に氣取つた歩かたで出て行つた。

間も無く狭山の濁聲が聞えて、脈のやうな洋服姿が扉口に現れたが、

「何有、それ程でもござせん。」

と捨白を言ひながら束々室の中央に進む。群松は片隅に立つて恭しく頭を下げた。

「何うです群松さん。種々御苦勞です。」と四邊を見廻しつゝ、「お蔭で大分進行しました。此室は未だ餘程手間が悪るのですかな。」

「七分通は出來て居るのです。」

「ハ、ア。成程。然うすると此次は何處へかゝりますか？」

「二階の廣間の方を先に着手しやうと、先日上田さんにもお話を致して置きました。」

「成程、々々。」莞爾して「未だ前途遠達ですなわ。」と悠然言つたかと思ふと、急に破鐘のやうな聲で「ト部！椅子を二脚ばかり持つて来い。」
 群松は心着いて自分の椅子を持出したが、此時、上田を連立つて入来る人の顔を見るや、アツト驚いて思はず後へ退つた。

九十二

客といふのは浅山秀政であつた。今しも上田と雑談を爲ながら他愛無く莞爾してゐたが、群松の方を一目見るや、是も驚いた様で眼を光らした。

此方は静に一足前んで「不思議な處でお目にかゝりました。」
 叮嚀に頭を下げるのを、チラと見たばかり、

「ア、君だつたか。」

と浅山は其限上田の方を向いて、

「中々お骨が折れますな。」突拍子も無く大笑を爲る。

狭山は不思議さうに二人を見較べてゐるが

「浅山さん、此人を御存知かな。」
 「はア、一寸知つて居るので。」と又笑ましげに「西洋室の方は未だ頓と果取らんやうですな。」

「然ればさ。此方は今から御覽に入れる筈では無いのでしたよ。それに私は洋館にいつては一向不案内ですからな。」

「否、物はかゝつてゐる。」と四邊を見廻して「然し其割には見栄が爲ん。遠慮無くないと、設計は好いが、裝飾が何うも氣に入らん。」

「ハ、ア、然様かな。」

と狭山は群松の方を見ると、彼は佛然として浅山を睨付けてゐるので、又

「然様かなあ。」

上田が慚愧と「お心着の點がございまして、何うぞ御遠慮無く御注意が願ひたら存じますので……。」

「否、私は専門家がや無いから、細い事を言ふ譯には行かんが、何うも悪口を言ふと一體に下品だね。」

『は、あ。』と狭山は又群松を見る。

『些細な點だが、何うも僕は然う感じるのですよ。上田さん貴方は何う思ひますな。』
 『はい、私は別に然うとも………否、寧ろ高荷に過ぎて却つて淋しく無いかと氣遣ひます位なので。』

『大違！僕は其御意見に不賛成ですな。然し斯ういふものは趣味の問題だから、一概には言はれんけれど。』

群松は先刻から一人で癪に障つてゐるので上田の方へ何うしたものだらうと目で訊ねると、口を出しては可かん、黙つてゐると同じく目配せを爲るから、不本意ながら唇を噤んで差俯いて了つた。

其中に卜部が椅子を運んで來たので、主客は室の中央に腰を下したが、淺山は猶且無遠慮に反返して其處邊を見廻し、

『ア、日本室の方はお好だけあつて、有弊に敬服しました。』

『否、私には彼の方が意に満たんです。』と狭山は脂切つた顔を撫でる。

『然うぢや無い、實に結構ですよ。』言つたかと思ふと不意に大きな聲で『群松！近

頃は少とも顔を見せん。』

『はい、非常に御無沙汰をして、何とも申譯が有りません。』

『無沙汰は爲方が無いが、何うだ少とは勉強してゐるか。』

『は………』

『餘り然うでも無いといふ噂だな。』と打笑つて『今から愚圖々々してゐる様な事では可かんせ、え？真面目に働かなけりや。』

群松は黙つてゐる。

九十三

『おい、群松！』と淺山は他を向いたまゝで『何時までも親の腔を囁る氣であつては可かんよ。一人立に成つたら一人で働かなけりやわな。』

『はい。難有うございます。然し私も御覽の通り、自分の働いで自分を過せるやうに成りましたから………』

『自分を過す？ハ、ア其は何より結構だ。然しお前はたしか自分一人ぢや無かつたけ

な。』
群松は僅に上眼を造つた。

『母親も有るし、其から今では家内も居る筈だなあ。』

『然うです。』と答へた聲は怪しく顔へた。

『而て見ると自分だけぢや濟まんせ。第一お前は宛もく腕の有る美術家のやうな事を言ふが、私の目から見ればな、未だ一本立は難かしい。』

『然うかも知れませんが。』

『然うだよ。狭山さんのやうな方が有つて、又上田氏のやうな老練家も居ればこそ、君は然うして手間に有つてゐられるのだ、其を自分の力だと思ふと間違ひだよ。え、自惚も甚しきものだよ。』

『イヤ浅山さん。』と狭山は咳一咳して『貴方は然う仰有るが、群松君は實に確なものです。テ。私は斯ういふ人物を得たのを非常に喜んで居ります。ナア上田さん。』

『御説の通りで……。』上田は一揖する。

『何うですかなあ。』と浅山は可厭な顔をして笑つたが『然し此男の事は何分私からも

お願申します。お役には立たんでせうが、今後お引立を願ひたい。上田君、貴方も定めし御厄介でせうが。』

『恐入ります。』

狭山は一人莞爾しながら『浅山さん、貴方と此群松君は何ういふ御關係ですな？』

『何様ね、宅に書生を爲て居たのですよ。』

『貴方のお宅に？』と仰山に驚き『イヤ、然うでしたか、是は實に奇縁でした。』

『ですから、今でも此男を自分の子のやうに思ふんですよ。』

『成程、全然それで了解しました。貴方は餘り悪口を言はれるから、私は先刻から冷して居つたのだが、成程！それでは御尤ですわい。』

『何處に成つても、親は作を赤兒のやうに思つてゐるやうな理屈で、私は此男を未だ美術家の缺片とも思はんです。』

『御尤で……世間の目とは違ふ。』と狭山は得て笑ひたがる。

『處が伴の方はこつさに好きな事を爲て、随分親に迷惑を懸けます。』

『御同様……愛が有るな。』

「氣を好く爲れば着わがる。酷しく爲れば拗戻る。イヤハヤ困つたものだ。」と何氣無く群松の方を見て「おい、此頃は少とも顔を見せん。自分が飯が食へるやうに成ると、私の事などは忘れて了つたのかい。おい、人間は義理が大事だよ。何程家い美術家に成つても、義理を辨へなければ土方に劣る。ナァ群松然うぢやないか。」

九十四

傍の者には落とも聞えやう、子を思ふ親の心とも思はれやうが、群松の身に取つては斯んな口惜しい事は無いのである。何れ皮肉な言葉の一つや二つ受けるのは、顔を見た時から覺悟してゐたやうなもの、斯う面皮を缺かされては今の立場として黙つてゐられぬので、

「淺山さん。」と彼は一足進んだ。

「何だ。」

「種々御教訓は有難いですが、然し那樣に仰有るなら私は辯解を爲る事も有るので。『辯解?』と淺山は向直つて『誰が辯解を爲ると言つたか。何だ其權幕は!だから…』

……だから私は困るといふのだよ。」

「けれど飯が食へるやうに成ると恩を忘れるなどと、他人の中で、しかも斯んな場所
で罵られては實に心外です。」

「アハ、心外が可笑しい。」と此方は大口を開いて笑つたが「でも其が實際だから爲
やうが無いぢやないか。他の前で言はれるのを恐るゝ位なら、平常義理を缺かんが可
い。」

群松は憤然として何か言出さうとした時、狹山が横合から、

「イヤ、群松君、貴方は何うしたものです。何も此方が罵つたといふぢや無し。然う荒
荒しい舉動は爲んものです。ナァ目上に向つて穩ならん口を利くのは貴方の爲に不
利益です。」と矢張葉爾して「まあ、年寄の言ふ事は黙つて聴くものです。」

淺山も有禁に主人の手前に耻ぢたか、顔を赤めながら、

「若い者は左右血の氣が多くつて、人の心持を誤解するから實に困りますよ。」

「其通り、然し又此元氣で無ければ可けません。」

「お互に此言を言ふやうに、成つては、最う駄目ですがな。」

二人は唯笑つた。群松は器量が悪い。が、口を出せば出すだけ益す不利な位置に立たねばならぬので、彼は終に唇を噛んで俯いたまゝ、足疾に室の外へ飛出した。而して廊下傳に庭の方へ行かうとする後から、

「一寸、待ち給へ。」と追かけて来たのは技師の上田であつた。

群松は振り返つて「ア、非常に失禮しました。」

「否。君は何處へ行くんですよ？」

「庭まで！一廻したら直に返つて来ますから……」

「其なら構はんがね、僕は又今の事で氣を悪くしたんぢや無いかと思つて。」

「何有然らぢやありません。」と群松は最早當の顔色になつてゐる。

「君、全く誤解しちやけませんよ。淺山さんも決して悪氣が有つて言はれたのでは無からうから。」

「解つてゐるんです。」と莞爾して「私だつて腹を立てたばかりぢや無い。長い間厄介に成つてゐて、随分我まゝも言つてたのですから、つい其時分の氣に成つたわけなのです。御心配なすつて下さるな。」

「然うですか。」と上田は頷く。

「お邪魔に成ると可けませんから、少しの間外してゐます。御用が有つたら呼んで下さい。」

強て何氣無い風をして、彼は庭の方へ下りて行つた。

九十五

狭山と淺山は間も無く車を連れて歸つて了ふ。上田は後に残つて、それでも群松を慰藉する意か、何の斯のと浮世話を持ちかけた揚句、好い加減に仕事を済して、歸りに何處かで一緒に夕飯を食はうと發議した。

那樣氣樂な場合じや無いから、群松は再三辭したのだけれど、有業に人の情の慈しく、旋て目白の邸を出で、上田の行くまゝに神田の資亭へ入つたのである。

深くは飲まぬが、それでも晩酌に一本位は行く口なので、群松とは好い相手だ、

「何うです、少とも飲んぢやないか、僕はかり大いに酔つて了つた。」

「私だつて斯様に飲んだのは初度です。」と群松は熱した額を押へる。

「何有君は斯様事で凹垂れるんぢや無いといふ評判だもの。」
「それは間違です。」

「まあ可いさ。」と上田は洋刀を下へ置いて首を突出し

「酔はん理山は僕丁と心得てゐるよ。だがね……君も若いよ。」

「何故ですか。」

「なか／＼苦勞を爲て來られたやうだけれど、未だ若いね。人の前で躍起と成つて顔
を赤くするやうでは、其處へ行く、僕等は老翁なもんだ、他が此方を侮辱したつて、
決して腹は立てん、縦し爲たつて舉止になんぞ見せや爲ませんよ。」

「私には那樣器用な演劇が出來ませんから一體然らういふ人間なのです。」

「だから若い、お若いよ。」

「其代り熱が有ります、血が有ります。隠忍な事は何うしてもやれぬよ。」

「隠忍は酷だね。腹を立てなくつても其が意氣地無しでは無い。畢竟下から出てもう
一倍先方を愚弄してやるのさ。」

「其こそ隠忍でせう。」と群松は淋しく笑つて「私は何うしても那樣事は出來ないので

す。」

「然うかしら、けれど其は損ですせ。」

「損でも爲方が無い。何有、其までに自分を殺さなければならんのなら、私は最う家
に引込んでゐるまでです。面白くも無い。」

舌鼓をして呷と酒を呑むと、味の無い苦いのが、思追つた胸に流込むのだ。

「充らんですなあ。事新しく言ふんぢや無いが、世の中は實に煩い。言ひたい事や爲
たい事が何程有るか知れないんだが、其を黙つて辛抱して、漫罵され嘲弄されてゐな
ければ飯が食つて行かれないのでせうか。」

「程々さ。」と上田は麵麩を撈りながら「人間が皆勝手に自我を主張して見給へ、其こ
そ秩序も何も立ちは爲ん。」

「爲うすると、強い者だけの自我は許して何處までも弱者は服従してゐる、其が社會
の秩序なんですか。」

「其處は……まあ……何だ。」と上田は口一杯に物を頬張つてゐる。

「何うでも可い。」と大きな聲で「勝手に爲るのだ。」

九十六

群松は又酒杯を探つた。

其翌日、上田は事務所へ来て群松の来るのを待つてゐたが、十時に成つても、十一時に成つても、群松は姿を見せなかつた。

斯んな事は今迄に無いので、上田は内々氣を揉んでゐると、十二時も近づいた頃、群松は悄然として入つて來た。

「ヤア！」と上田は悪い顔も爲す「何うしましたい。今日はお休暇かと思つてゐたが。」

「御迷惑をかけて、何とも申譯が有りませんでした。」

「何有、那樣事は構はんが、僕は又昨日の一件から、君が氣を悪くしたんぢや無いかと思つてね。」

群松は嫣然して作業服に着更へたが「昨夜飲過ぎたものですから………」と心着いて「然う言へば全然忘れてゐた。昨夜は非常に御馳走に成りました。」

「否。」と目を細くして菓を飲み「だが面白かつたね。」

相手が黙つて出て行かうとするので、

「待ち給へ、君是から仕事を爲るのかい。」

「えゝ！」と振返る。

「よし給へ、今日は最早半端ぢやないか。」と言つたのを、何う聞違へたのか群松は一寸顔色を變へた。

「遅刻したのは實に恐縮です。」

「那樣譯ぢやないんだよ。君は何うも神経過敏で可かんな。」

「然うでせうか。」

「少と香氣にしたまへ、香氣にさ。昨夜も言ふ如くだ。物事を氣にしらや可かんよ、世間の奴等は皆馬鹿だと思つてゐなくつては………」

諄々として昨夜の復習が初りさうなので、群松は少からず弱らせられた。

「左に右夕方までやりませう。」

「其が真面目過るといふんだよ。ね、過たるは及ばざるが如しで、氣色の悪い時なん

ぞ構かまんから骨ほねを休やすめるさ。まあ話はなし給たまへ。」
 一人ひとりでゐる方が何なにの位くらいかましましたらうと思おもつたけれど、振ふ切きつて行くだけの張はり合あひも無なく其そのまゝ愚ぐ圖ず々々に腰こしを懸かけて了しまつた。
 其そのから小こ一じ時じ間かん許ばかりといふものは、先せん生せい得たい意いの處しよ世せ法はふを聞ききながら、群ぐん松まつは一心いっしんに考かんがへもつかぬ考かんがへに耽たふつてゐる。
 と、卜うら部べ老らう人じんが次つぎの間まから入はいつて來きて、
 「ヤ、今日こんにちは大だい分ぶんお話はなしが持もつてますな。」
 「然さうでも無ないのさ。」と上う田たは無ぶ愛あい想さうに横よこを向むいた。
 「少ちと老らう人じんもお仲なつ間ま入いりが為ためたいものですなアハ、」と笑わらつて「其そのは然さうと、唯ただ今日こんにち本ほん橋はしの御ご本ほん宅たくから車しや夫ふが参まゐりまして……」
 「御ご本ほん宅たくから？」
 「え、」と間ま誤ご々々しながら懐ふところ中ちゆうから手て紙がみを取とり出だして叮てい吟いんに皺しわを延のびし「え、是こゝを内ない々々で貴あなた方かたに上あげて呉くれといふ事ことで。」
 「内ない々々？」

と上う田たは訝いぶしげに群ぐん松まつの顔かほを眺ながめたが、
 旋まわつて文ぶん句くを讀よみ了まると、喫く驚きやうして又また群ぐん松まつの方ほうを見みた。

九十七

手て紙がみを讀よみ了まると、上う田たは酷ひどく難がたかしい顔かほを為なして考かんが込んでゐたが、旋まわつて返かへつて、
 「車しや夫ふは歸かへつたんですか。」
 「否い、其その御ご返へん事じが有あるなら戴いたいて参まゐるといふので、待まちつて居ゐります。」と卜うら部べ老らう人じんは答こたへた。
 「宜よろ敷しい。」と應おう揚やうに「何なにれ今こん晩ばんにでも私わたしが参まゐつてお話はなを申まを上げると言いうて下ください。」
 卜うら部べは黙だまつて引ひ退たいつた。群ぐん松まつは先さき刻ときから是こゝを好このむ幸さいひに、自じ分ぶんの事ことばかり考かんがへてゐたのだが、上う田たが妙あやに屈くつ托たくして居ゐるのを見みると、
 「何なにか御ご用ようでも出で來きたのですか。」
 「否い。」と此こゝ方かたは平ひら手てで顔かほを撫なで、眩くらしさに目めをバチクリしながら「充つらん事ことです。時ときに今日こんにちは實じつに好このむ天てん氣きですな。」

「然様」と群松も其言葉に引かされて、無意味に窓の外を見た。

「君は何ですかい、松島へ行つた事が有りますか。」
餘り突飛な質問なので、一寸返事に間諛ついたが、

「行つた事は無いです。何故？」那樣事を訊くのかといふ面色。

「別に何といふ理由も無いが、彼處は實に好いね。是非一度行つて御覽なさい。日本三景の一だもの……」

「名前だけは好く知つてますが。」

「アハ、ハ、説明するにも及ばぬかね。」と上田は故意とらしく笑つたが「君の名が群松だから、偶然松島を思出した。アハ、ハ、ハ。」

其限で、今迄の多辯に引更へ頓と片着けて了つたのを、群松は訝しく打目成つたので、自と座が白けた揚句、彼は又椅子を立つて、

「左に右少しでも手を着けて置きませう。何うも氣が濟まんですから。」

「又仕事かね。」とハツとした様で「可いですよ君。今日は休み給へと言ふのに。一日や半日……何うせ無駄な事だ。」

「氣が濟まんですからなぬ。」

と群松は不思議に其事ばかりに焦慮ちつゝ、室の中をウロ／＼してゐたが、相手の透を
見て逃るやうに例の應接室へ行つた。

斯ういふ仕事に手を出したのは今度が初度であるが、豫て他の意匠も見、自分でも多少研究を爲て置いたので、彼は其好と信する處を遺憾無く發揮した。他から頼まれたといふよりも、自分の物を造る意で、一生懸命働いたのだ。上田は元來何の考も無い平凡な男だから、渾て群松の言ふがまゝに少しも關涉は爲なかつた。

斯うして熱心に働いた結果は、誰よりも彼自身には非常に満足なものであつた。上田は無暗に其出來榮を褒めて、唯理想が少しく高尚に過ぎたやうだと評した。是ばかりは或は當つてゐるかも知れぬ。群松は此室と主人との均衡に就ては餘り考へてゐなかつたのだから。

彼が昨日から憚いでゐるのは、譯も解らぬ淺山が一言の下に貶しつけた、其に對する不満もあるのだ。是だけに爲て置いて、悪く言はれる筈は無い、決して無い。と群松は歩きながら繰返して言つたが、其應接室の扉を啓けて、美しい秋の日の射込む室内

を見た時、三度繰返して言った。
『悪く言はれる筈は無し』

九十八

其翌朝、群松は床の中で蓑を焼らしながら新聞を讀んでゐる處へ、義妹のお近が手紙を持つて来た。

『兄様起きてゐらつしやるの？』

『ア、お早う。』と目を擦りく『最う遅いかね。』

『否、未だ六時半よ。今ね、此郵便が來ました。』

群松は手に取つて見ると、差出人は上田正信としてゐる。何用かと訝る間も無く開封して讀下せば、

拜啓昨日狹山氏本宅へ参り候ところ、主人の都合にて西洋室の方は一時唯今のままにて工事を見合せて致度さ旨に有之、折角大兄の御苦心を煩はし彼まで切程取りしを此儘中止致候は何とも残念と存候らへ共、何分右やうの事情にて、小生の力

には如何とも致し難く、就ては明日より御出勤に及ばず、此儀承知願上候。猶御約束の俸給は當月分悉皆可差上候に付御都合次第、本宅の方へ御出向、御受取り下されたく候。

と記して、其末に、

追て小生一人人としては、全力を擧げて工事の繼續運動を致すべく候ま、機会を見て大兄の復職を計るべく、猶又自然御用も候は、何によりは御相談を蒙り度候。

と小さく書添へてゐる。群松は讀了ると状袋ごと引丸めて遠くへ掻やり、フ、ンと自暴に嘲笑つたが、其ま、枕に就いて目を閉ぢた。

『兄様、最う起なくつては可けませんよ。時間たわ。』

『まあ可いよ。』

『だつて遅く成りますわ。』とお近は枕頭で氣を揉む。

『構はんよ。今日は休むんだから。』

『何うか爲すつたの？』

「可いから彼方へ行つて呉れ。」と言捨て、スツボリ夜具を破つて了ふ。お近が出て行つて少時すると、今度はお光が慌て、入つて来たが、

「貴方！今日はお休みなさるんですつて？何故です。」

「何故だか知らんさ。」と夜具の中から答へる。

「體でも悪いのなら致方が無いけれど。」

「別に悪か無い。」

「ぢや何うしたんですよ。氣に成るわ。」とお光は揺動かしつゝ、「毎日辛いでせうけれど、一思に起きて頂戴な。さあ、起きて了へば何でも無いのよ。」

群松は溢々顔を出して、マヨ／＼と天井を見詰めてゐたが、

「勤らなければ何も骨を折つて早起する必要は無い。」

「今日に限つて可怪しいのね。」

「今日ばかりぢや無い。お光、己は最う仕事には行かなさ。」

「ゑー」と顔色を變へて「何うして？」

「だつて断られ、己を得んぢやないか。」

お光は茫然として良人の寝姿を眺めた。

九十九

「何うしたの貴方。」とお光は懸寄つて「お氣に入らない事が有るか知らないけれど、其處がお勤めなんですからね。妾達の爲を思つて下さつたら、最う少し我慢を爲して下さいな。」

「那樣事をお前に教はるか。」

「でせうけれどもさ。今貴方に氣紛れた事を爲れたら、其こそ眞實に立瀬が有りませんもの……。」

「情無い事を言ふな。」と群松は床の上に跳起きて「お光、情無い事を言つて呉れるなよ。藝術家の妻なら見得にも此様時に意地を張つて呉れ。」

「それは張りますとも！けれど……。」

「けれど何だ。けれど何うしたんだ？」

「貴方こそ何うしたのです？」

「今日限り免職に成つたんだよ。」と手紙を尻目にかけて「此手紙一本で段落が着いたんだ。」

「ちやめ断られたんですか。」

お光は彌よ飽氣に取られて、穴の明く程良人の顔を見詰めるのだ。

「然うとも。だが己は是を耻辱とも不名譽とも思はない。爲るだけの事を爲て……其以上の事を爲てゐる以上は、願て何も耻ぢやしない。唯力が及ばなかつたのだらう。然らずんば己の爲事よりも、群松といふ人間が氣に入らんのだらう。」

「貴方何か怒まれるやうな事でも有つたの？」

「覺は無いが、怒む奴は怒むのさ。」と群松は目を閉ちて熱と俯いたが「まわ可い、お前方は心配するには及ばんよ。雇つて呉れる者が無くつても、自分の力で働いて見せる。何有二十や三十の金は、其意で稼げば何でも無し。」

お光は其言葉を耳にも入れず、頻に唾を呑んでゐたが、

「貴方、一昨日浅山さんが、來たと仰有つてね。」

「然うな。」

「可怪しいわね。」

「別に何でも無いぢやないか。浅山の來た事と、己の断られた事と……」

「其處だわ貴方、浅山さんと先方の人とは戀意なんでせう？それで浅山さんと貴方とは知らない中では無いんですもの、可怪しいわ。」

「然うかね。」

「先方だつて、貴方と浅山さんの仲を思つたら、義理にも斯様事は出来なからうぢやありませんか。加之貴方一昨日の今日ですもの。妾其間に何か譯が有りはしないかと思はれるのですがね。」

「あゝ、お前も其處に氣が着いたのか。」と群松は初めて嘆息して「人を怒むのぢやないが、實は己も其を疑るのだ。しかも浅山が己を罵倒した事を考へると、或は想像が當りはせんかと思ふ。」

「まわ何處まで彼の方は意地が悪いのでせう。」とお光は涙組んだ。

「其も是も皆樂に成るのだよ。何んな迫害を受けやうが、人間といふものは然う容易く腰が抜けやせん。」

『だけど、全く然うとすれば餘りだわ。』

『何程言つたつて爲方が無いといふのは。心配するなよ。今負けてゐたつて、何時か見返つてやる時が来る。』

と雄々しく言放つたが、群松の目も涙に濡んでゐるのだ。

百

母親には唯昨日も今日も仕事の都合で少時休むとのみ、確とした事も告げなかつた。で、家に安閑としてゐるのも心苦しいか、群松は朝から外へ飛出して、夜更に成らなければ歸つて来ぬ。

お光は其事を聞いてから、落膽して病人のやうに成つて了つた處へ、折角の燃が元へ戻りさうな有様なので、いと心細く思つただけれど、良人の心を察すると有様に其を止める譯には行かなかつた。

目白へ通ひ出して以來、久しく香川を訪ねなかつたので、群松は第一番に西片町へ行つた。紹介者に此頭末を報せるのは自分の義務だと信ずると共に、せめて道る瀬無い

胸を打割つて話したら、少しは慰められる事も有らうと考へたからである。

彌生町を抜けて追分まで来ると、最う氣がワクワクして、少しも早く香川に逢つて見たく成る。無上に戀しく成る。それから先は息を切りながら、間道を大意に例の腐れかゝつた枝折門の近くへ来た時、門の前に香川の雇婆さんが、近所の細君らしい人と立話を爲てゐるのが目に入つた。其婆さんの顔を見てさへ、群松は何が無しに嬉しがつたので、

『ヤア、御無沙汰を爲ました。』と先づ聲を掛ける。

先方は喫驚して振返つたが『おやまあ、群松さん、お久しぶりでございました。』

『忙しかつたものですよ。』と極り悪さうに笑ふ。

『然うでございますつてね。其でもお忙しいのは何より結構でございます。』

『何有………時に香川君は家ですか。』

『否ね。』と婆様は目を丸くして歩寄り『お留守なんですよ。今朝早くお立ちなすつたので。』

『立つた？旅行したのですか。』

「はい急に。昨晚電報が参りましてね。貴方！お國のお父様が御大病だといふ報なのです。」

「其は大變だ。」と群松は両手で帽子を掴んで「僕は無沙汰を爲たものだから、少くも知らなかつた。」

「香川さんも今迄御存知無かつたのです。何でも急な御病氣らしいのです。」と云つて心着き「まあ斯様處でお話を爲て御免なさいまし。左に右此方へお通り下さいませんか。」

周章と内へ入るのを呼止めて、

「だが留守なら上る必要もありません。今日は此處で失敬しやう。」

「それでも貴方にお頼み申せと言置いていらした事が有りますのでね。左に右。」斯う聞く上は直にも歸りかねて、群松は張合も無く座敷へ通ると、婆さんは香川が遣して行つた事、何れ委細は國へ歸つてから手紙で群松へ頼むが、萬一急な事でも有つたら、第一に群松へ行つて相談しろと命じて取る物も取あへず今朝の一番で新橋を出發した由を話した。香川の郷里は土佐である。

「あゝ然うでしたか、香川の事なら頼んでも盡さなけりや成らんのだから、留守中は何に限らず御相談相手に成りませう。」と言つたものゝ、今の有様を顧ると、群松は頼効無い自分が氣耻かしらう。

百一

三十分程話込んで群松は香川の家を出たが當が外れて此ま、歸る氣にも成らず、茫然本郷通を歩きながら、是から何うしたものだらうと考へた。

不快と、失望と、不安と、忿懣と入亂れて心を掻撈る。斯ういふ時に思ふさま打明けて語らう友が有つたらと、其ばかり戀しく我を忘れてお茶の水まで来た時、彼は偶と神田の裏神保町に居る吉川を思出したので直に其方へ足を向けた。

旭館といふ高等下宿屋の門を入つて、其人を訪ねると、旋て二階の奥の、八疊敷の小奇麗な間で、本箱から机、額、茶道具にいたるまで、一人者には珍らしく整然と取片附て、床の間には花まで生す

吉川は机の前に座つて新刊の小説を讀んでゐたが、客、

出迎へ、

『是は珍らしい。能く来て呉れたね。』

と例の如く愛想が好い。

此方はキヨロ／＼室内を見廻しながら座に就き、

『或は居ないかと思つて心配して来たんだけれど……』

『あゝ、恰度好い處だつたよ。』

『然し何か用でも有るんぢやないか、お邪魔に成るなら言つて呉れ給へ、又出直しても構はんのだから。』

『何有君！』と吉川は自分で茶を淹れながら『今日は僕も休暇でね。實は退屈してゐた處さ。悠り遊んで行つて呉れ。』

群松は貰を出して悄然それを吸つけながら又改めて其處邊を見廻し『全く奇麗だ。君は中々紳士的生活を爲てゐると見えるな。』

『アハ、お褒にあづかつて恐入つた。何にも金目の品は有りや爲んよ。だけど獨身者はせめて斯様事にでも氣を紛らかさなけりやね。考へれば痛々しい次第だ。』と云つ

て書箱の上へ置いた菓子折を取り出し『今朝貰つたのだが一つ何うだ。君はたしか甘黨だつたと思ふが。』

『有難う。』と群松は其美しい西洋菓子を見たばかり。

『然し好く訪ねて来て呉れた。僕は近來は何處へも出ないので、つい疎遠に成つてゐたが……あゝ、然う言へば全然忘れてゐた、君は此頃狭山の別荘へ通ふんださうだね。』

『狭山を知つてゐるのかい。』と喫驚したやうな顔色。

『否知らんが、名前だけは始終聞いてゐるよ。可成實業界では巾の利く方だから。其は左に右、君も極つた収入の途が出来て何より祝すべしだ。彼處寺の氣に入つてさへ置けば、將來好い手蔓も出来る譯なものなわ。僕は其話を聞いた時には蔭ながら大いに喜んだよ。』

相手に勝手に喋らして置いて、群松は昵と火鉢の中を見詰めてゐるのだ。

「時に君は是から社へ出るんぢやないか。」と群松は突如として口を切る。

「處が、恰度公休なんだ、まあ悠りして行き給へ。」と此方は無造作に菓子を煩張りながら「君は何うしたんだ、毎日通つてゐるといふのに、猶且休日かい。」

「僕は最う仕事になんか行きはしないんだ。」

「え？何うして！」

「二三日前に………廢た。」

吉川は呆顔をして「是は驚いたね。僕はつい此頃其話を聞いたばかりなんだが、最う廢したつて、君の飽つばいのにも困るなあ。餘り早過るぢやないか。」

「だつて斷られ、は爲方が無い。僕は耻を話すやうだが、先方から斷られたのだよ。」

「フーム、何ういふ譯や。」

「其は解らんが、大方役に立たんのだらう。」と群松は自分ながら哀れに笑つた。

「役に立たん？否那樣事は無いよ。有るべき筈が無い。」

と吉川は熱心に言つて少時考へてゐたが、俄に腕組を爲て、

「君是には何か理由が有りは爲んかね。」

「然うかしら。」

「確に有るよ。僕の想像に過ぎんが、能く考へて見給へ。何か思當る節が有るに違無
So」

群松は恰も自分の心の不平を割つて出すべく爲向けられたやうな氣が爲て、

「君、然う言つて呉れ、ば話すがね、實は僕も其に就いては心外な事が有るんだ。」

「それ見ろ。」と吉川は呷と茶を啜む。

「君も知つてるだらう。彼の淺山………僕の以前厄介に成つた、淺山ね。彼の人其君
君、君と懇意なんだ。で、僕の斷られる前日偶然仕事場で淺山に逢つたと思給へ。其翌
翌日から僕は浪人に成つたのだ。」

と段々聲が小さく成る。吉川は世にも不思議な面色で其を傾聴してゐたが、

「然うすると、何か淺山さんが君を排斥したやうに聞えるが、那樣解らん話は無い、
全然其事とは正反對らしいせ。」

「處が、それに就ては曰くが有る、淺山が僕を憎む理由が有るんだよ。」

「可笑しいねえ。ぢやあ君に憎まれる覺が………何かい、覺が有るのかSo」

「此方は少しも知らなかつたのだが、近頃漸く気が着いたんだよ。僕が彼處へ出入しないのも畢竟それが原因なんだ。」

「へえ？何ういふ事だい。」

「其は言はれんがね。」

「フム。」と鋭い目で見たが「大層秘密だと見えるな。」

「何有言つて了へば充らん事だけれど……。」

「まあ強て他の秘密を聞くにも及ばんが。」

斯う言はれると、言はずにゐるのが氣不味く成つて、群松は一人魚々した揚句、旋て思切つて、

「秘密ぢや無いといふのに！君だから……君は僕の家の前身を知つてゐるから話すがね。猶且家内の事に關係してゐるんだよ。」

「細君の。」と喫驚して「あゝ然うか、ヤそれで解つた。」

「大概御存知だらう。」と群松は額の汗を押拭ふ。

吉川は又無言に頷くのみだつたが、偶と顔を揚げて

百三

「群松君、話の次手だから言ふが、僕は細君の事に就いて君に話したい事が有のだ。」
群松は返事も爲すに相手を打目成つた。

「外では無いが、君は細君の事に就いて少し考へて呉れんと困るせ。」

「考へるとは？何を……。」

吉川はやゝ躊躇したが「斯んな事を君に向つて言ふのは實に心苦しい譯なんだがね。怒られても構はん、怨まれても爲方が無い。僕は君の友人として、僕自身の義務を盡したいと思ふんだから。」

「可厭に難かしく成つたね。」と群松は心ならずも笑つた。

「否、冗談ぢや無いんだよ。君、眞面目に聴いて呉れ給へ。」

「無論、僕等の身の上に関した事だもの、疎には聴かならさ。」

「だが實際言苦いなあ。」と吉川は腕組のまゝ體を前後に動して「調子に乗つて充らん事を言つて了つた。まあ廢らうよ。」

「其は可かん。親切に言つて呉れる事を中途で見合すのなら、随つて君の親切も中途で見合せに成つたものと認るよ。」

「何うも理窟責だな。」と頭を掻いて「可、それぢや言つ丁へ。然し豫じめ断つて置くよ。僕が言苦い事なから、君も聴苦い事だ……」

「あ、御念には及ばん。」と群松は観念の眼を瞑つた。

「君、細君だかねえ。彼の細君とは……だね。何うも甚だ失敬だが、別れちまつた方が得策ぢやなからうか！」

一句先づ相手の色を探るといふ様で、吉川は息を凝らした。

「ねえ君。」

「……………」

「喫驚したらう。其は承知なんだが、僕は熟々考へた結果、何うも其方が……………」

「フム。」と群松は頷いて「其處まで立入つて言つて下すつたのは先以て難有い。だが君に笑はれるかも知れんが、僕は一寸聴きたい。何故別れる方が可いのかね。」

「何故つて、委しく言はんでもだ。其方が君の爲に得策だらう。」

「成程、其事は最初から解つてゐる。一體僕なんぞ、自分の働きから考へて、未だ未だ女房を持つべき資格は無い。だから其は解つてゐるかね。」

「然ういふ意味ぢや無い。君が働が無いなんて、那樣失敬な事を言やわ爲ん。細君は可い。大いに持ち給へだ。」

「彼は可かんと言ふのかい。其も了解してゐるよ。だが僕は自分の利益の得失で妻を貰つたのぢや無いもの。否得策で無いからと言つて、それで妻を離別する事は出来んのだ。」

吉川は何が無しに面を背けたが「然う……………然う出られると僕も話の継穂が無く成るんだ。總て初めから投げてゐるんぢや逆も相談には成らんだけれど、又友人の立場から見ると、必ずしも其自棄に賛同して、可いかい、人情の或一小事の爲に、其人の眞價が埋没して彌ふのを看過しては居られんからなわ。」

「眞價？、僕のやうな者にも眞價が有るかね。」

「是は驚いた！」

群松は旋て沈んだ語調で『まゝ何でも可い君が然う言つてくれるなら、自分も眞僧の有る人間として、改めて君の御忠告を伺はう。』

「那樣なら此方も満足だ。處で最う斯う成つたら何も彼も遠慮無く言ふが、君は彼の細君と手を切つて了はんと、是から先未だ未だ苦まなければ成らないよ。苦むのはお互に爲方が無い。君は或は順境に立つより逆境に處して藝術の爲に闘ふとか何とか言ふかも知れんが、其は要するに自棄で、我々は好んで無理を爲る必要は無いんだからね。」

「吉川君！」と此方は悶しさに、『嗚い事は言はずに譯を話して呉れ給へ、何故僕は妻と別れなければ成らんのか。』

「イヤ、其事を今説いてゐるんぢやないか。僕が委しく述べなくつても、恐らく君も思知つてるだらうと考へる。」

『其だけか？』

「然うさ。嗚く言ふなどの御注文だもの。」と吉川は冷かに言つた。

『然ういふものかねえ。』

『何が？』

「否、餘り君が眞面目くさつて言ふからして、本人に何か重い落度でも有るのかと思つたんだが、蓋し張合の無い話だ。」

『良樂は口に苦しかね。』

「苦くも甘くも無い。素湯を飲んでも腹は張るのに、餘り充らな過ぎるぢやないか。」と吉川は面當がましく笑ひ出した。

『ぢやあ肯かれないんだね。』

「其だけでは！肯くも肯かんも僕は毫も感が無いよ。」

「して見ると、君は將來飯が食へなく成つても、餓死しても、終に自分の誤りを悟らんかも知れないんだ。」

「あゝ。願くは然うありたい。」と群松は嘆息を吐いて「君、自棄ぢやないが、僕は願はくは死ぬまで何にも悟りたくは無いですよ。」

『度し難いな。』
『然し安心して呉れ給へ、僕は眞逆に懐中手を爲て餓死も爲ないから。又那樣充らん理由のもとに、今更精練の妻を捨て、郵便貯金を爲やうとも思はんから、僕は生きんが爲にのみ働くのぢやないよ。』

『其では死にたい爲に情るのか。』

『まあ、其理屈は君にはお解りに爲るまい。』と冷笑しながら『先刻僕は自ら眞價が無いと言つたが、一寸取消して置く、猶且斯う思ふ處が眞價だつたのだ。』

『何處まで曲つて出るんだらう。』と吉川は怒りも爲ずに『まあ激し給ふな。斯ういふ事は一朝一夕に法が付くのではない。』

『馬鹿を言ひ給ふな。人情だよ、人情の問題だ。仕事の話とは譯が違ふ。』
無言で俯く吉川の前に、群松は昂然として言放つた。

百五

苦しい思を養らす爲に、わざ／＼友を訪れた群松は更に思がけない新しい傷を負はせ

られて、其夕方神田の下宿を出た。

日來交友の少い男だから、斯う成ると何處へも行處が無し。然りとて家へ返る勇氣も出ないので、やゝ暫時南神保町の電車停留所の處をウロツいてゐたが、何だか斯うしてゐる中に病氣にでも罹りさうな細かい氣がした。と同時に酒を思出す。氣着ても飲まなければ死んで了ふ。と考へたから、彼は半ば恐怖の念に驅られつゝ其邊の牛肉屋へ飛込んだ。

恰度夕飯時分なので、二階はなかく込合つてゐる。其一番奥まつた壁際に、他人の立つた跡らしく、皿や茶碗の置散された處へ、彼は狐鼠々々と座り込んだ。而して四邊を見廻すと、中には食ふ事や喋る事に餘念の無い客も有るが、大抵の人は物珍らしさうに新來の自分を見詰めてゐるらしいので、彼は強と赤面しながら、

『畜生、何を見てゐるんだ。』

と呟やいた。處へ女中がお詔を聞きに来る。

『ロースと酒だ。酒は熱くして……』

女中は小生意氣な返事を爲て、散かつた品物を膳に載せると、フイと立つて階子段の

方へ行つた。間もなく詭へた物が来る。

此方は待構へて矢庭に二三杯煽つたが、酒は毒のやうに苦い。

『馬鹿が怪しからん事を言やがる。』

と舌鼓を爲て見ても一向に氣が晴れぬので、更に一杯湛々と注ぐと手が顫へて酒が盃の上へ零れる。

『今に思ひ知らせてやる、今に……』

續いて斯う思詰めてゐるうちに、俄に例の淋しさが胸に迫つて、居ても立つても耐らない。

『何故、此頃のやうに面白くも無い事はばかり湧いて来るのだらう。俺は那樣悪い事は爲た覺が無いのに。』

腹立が和らぐと共に、段々情無く成つて、自分の前途は最早望も絶えて了つたのであるまいかと考へられる。一つ蹉跌いたが原因で、逆落しにハマつて其限起てなく成るのであるまいかと……。

それから夫へと分入ると、意地も張も挫けて了つて、頭は自から下り、目はたるんで

只頭へ響く血のめぐりがズキ／＼と刻むばかりだ。物の十分ばかり此まゝでゐる中、偶と甲高い笑聲が耳に入つたので、彼は驚いて目を睜くと、直傍にゐた二人連の客が今立つ處で、それが二人とも此方の鍋を尻目にかけてゐる。鍋の中には一人前の肉が葱も入れぬまゝ焦付いてゐる。群松はハツと度を失つて『姉さん酒のお代りだ。』と叫ぶ。

百六

偶と氣が着くと、非常に明るい街を腕車に乗つて通過する。群松は驚いて四邊を見廻したのだが漸う此處は銀座通だとなと當りがついた。其と共にベロ／＼と成つて牛肉屋から出た事、恰度通かゝつた車夫を呼止めて築地まで行けと命じた事が、夢のやうに思出される。彼は先刻此勢で淺山の邸へ行かうと決心したのであつた。

『それも可からう。一人で憤慨してゐたつて爲方が無いから。』
自分で自分の行動を批評する。酔に亂れた頭腦は今迄の反動からか極めて冷静に成つ

て、感情は鋭い。

「何う成つても構ふものか、行れる處まで行つて見せる。」

と濁いた唇を嘗めながら思つた。
腕車は銀座三丁目から横へ切れて、やがて橋を渡ると、真暗な川沿を真直に、目指す
浅山の門前へ来る。

「此處で可し。」と群松は轆を降させて「おい、何程與るんだつけな。」

「二十五錢、お約束です。」

飄々する足を踏しめながら、漸く賃錢を拂つて、潜門を押して見ると音も無く啓いた
突當りの玄關には燈火が點いて、子供の騒ぐ聲が盛んに聞えるから、未だ宵の口だら
う。

「御免なす。」

言下に障子が啓いて、十八九の書生が顔を出せば、あとから子供が二人、押合つて外
を覗く。

「はい、何方ですか。」

「何方ですか。」と男の子が真似を爲る。
「僕は群松といふ者です。御主人が御在宅でしたら、一寸お目にかゝりたいので。」
「群松……何と仰有るのですか。」
「可いわ、群松さんて家の知つてる人よ。」女の兒が此事を奥へ通じる間、群松は煩く
つき纏ふ子供達を相手にしてゐると、旋て書生が奥から引返して、
「唯今然様申上げましたら、手放されん用事が有るので、今晚は御面會が出来んとい
ふ事でした。」

「然うですか。」と群松は微笑んで、「其では奥様にお目にかゝりたい。」

書生は佛頂面をして再び奥へ入つたが、今度は此方へ通れといふ。

奥の應接間へ行く後から子供達はゾロ／＼附いて行く。相手欲しさで、何か面白い話
でも爲て貰ひたいのであらうが、其お客は碌に笑顔も見せず、黙りこくつて座つてゐ
るから、二人とも大當違らしい。

すると隔の襖を啓けて、亮子が平常の元氣の好さうな顔を出す。

「まあ、お珍らしいのね、何うしたの斯様に遅く成つて……。」

と火鉢の向うへ座りながら、

『好い御機嫌ね。』

群松は挨拶する事も忘れて『何うしてゐるか。』

『だつて眞赤ぢやありませんか、何處でか飲んで来たのでせう?』

百七

『無論飲んです。飲まなければお宅へなんぞ来られやしません。』

『おや、何故?』

『將にお解りに成るでせう。』

亮子は訝しげに見たが、其言葉を悪くも取らなかつたのだらう。

『然ら。』と和しく受答へて、『妾もね、病氣は何う爲すつたかと心配に成るから、お見舞に行かうと思ひながら、つい御無沙汰を爲ましたわ。』

『否、決して其には及びません。』と群松は苦々しく言つた。

『でも結構ね。此頃は全然快く成つて、狭山さんの別荘へ通つてゐるんですつて?』

日其事を聞いたので、妾眞實に安心しましたよ。好い都合でしたのね。』

と他事では無いやうに喜ぶ。其不知々さがグツと凝に障つた。群松は顔へ聲に、

『其事を何處からお聴きでした?』

『貴方のお母様が仰有つたし……。』

『母が。』と喫驚して『貴方は母にお逢ひなすつたのですか。』

亮子は迂り口を迂らして失策たと思つたが最う取返しがつかぬ。

『え、途中で一寸お目に懸つたのよ。那樣に喫驚する事は無いぢやありませんか。』

『私には少しも那樣話は爲ない。』

『大方お忘れなすつたのでせう。年寄の事ですからね。其から其後、主人が狭山さんと一所に彼の方の別荘へ行つた時、貴方に逢つたといふぢやありませんか。』

『計らず御目にかゝりました。』と群松は故意と力を籠めて言つた。

『主人も大變喜んで居りましたよ。群松は彼様して稼ぐ氣に成つて呉れたのは實に幸ひだつて。何しろ狭山さんは彼様にお金の有る方だし、加之に商人としては物の解つた方ですから、彼の人に信用されれば貴方の爲に悪い事は無いわ。』

「種々御心配を懸けまして、相済まんと思つて居ります。」
 「あら、群松さん厭味を言ふんぢや無くつて、今迄は碌に力にも成らなかつたのですけれど、恰度狭山さんとは近頃御懇意に爲てゐるし、又貴方が辛抱してさへ下されば此後家だつて真面目にお世話を爲るわ。妾其事は屹度受け合ひますよ。」
 親切に言へば言ふだけ、此方は腹に据かねるのだ。群松は冷笑つて、
 「然し最早御面倒を懸ける必要もありませんよ。私はお世話に成らないでも可うござます。」

「随分現金ねえ。」と亮子は冗談のやうに、「勤め口が出来たからなの……。」
 「否、其口を失つたからです。奥様、貴方も好い加減に他を騒弄なさるが可う。」
 「え？何故……何うしたのよ。」と亮子は清しい眼を睜り「又妙な事を言出したのね。」
 群松は嚇として「失敬な。貴方等は何處まで此弱いの者を着るんです、而して那樣體裁の好い事ばかり言つて、失敬な！公然と他を苦しめるなら未だ立派かも知れんが、廢へ廻つて那樣卑劣な事を爲さる。それでも人の上へ立つ紳士と言はれるんですか。」
 「貴方、今日は餘程酔つてゐるのね。」と亮子は飽氣に取られる。

「大きなお世話です。酔はうと酔まいと此方の勝手だ。」
 「其で何うしやうと言ふの？貴方一體何を言ひに来たの？」
 「文句を言ひにです。」
 「誰に……。」
 「淺山さんに。」
 と段々聲が高くなるので、子供達は顔あがつて母親に縋ついた。

百 八

亮子は一寸眉を翹めて「可けないわ。貴方今日は餘程何うかしてゐるんだもの。第一那樣に酔つてゐちや駄目よ。」
 「怪しからん事を。二言目には酔つてゐると、人を酔漢をかきに爲さる。第一其からして失敬だと言ふんです。」
 「失敬でも何でも可いの。左に右今夜はお歸りなさい。而して話す事が有るなら、明日出直しておいでなさるが可いわ。ね、悪い事は言ひませんから。それに淺山は今夜

調査物が有るので忙しいのです。』
 子供を和めるやうに言つて聞かせると、群松は益々躍起と成つて、
 『體裁の好い事はかり言つて、私に會へないから逃げてゐるのでせう。有難に良心に
 答めて……』

『え？不思議な事を言ふのね。』と亮子は抱えてゐた子供を突放して『何程お酒の上だ
 つて餘りな言葉ぢやありませんか。主人が何か悪い事でも爲やしますまいし。』
 『處が爲たのです。爲たから私は文句を言ひに来たのです。今も申したぢやありませんか。
 上流だとか紳士だとか言はれる癖に嫉妬心の爲に弱い者を苦しめて、揚句の果
 が糊口の……人の箸も茶碗も取あげやうとする。斯様暴戻な事を爲れて黙つて居ら
 れますか。』と目を据ゑて『何故那樣に喫驚なされるか。貴方等は元來他を苦しませる覺
 悟で爲たのでせうから、今更苦情を持たされて間違々々するには當らんでせう。那樣
 驚いた真似だの、不知々々しい事を爲たつて、其に欺されるやうな私ではありません
 や。』

『群松さん一寸……貴方それは全く何かの感違よ。貴方が狹山さんの方を廢めら

れたつて、何も家で知つた事ぢや無いわ。』

『馬鹿を仰有い。』と群松は喚いたが『貴方と押問答したつて暖簾と腕押だ。私は淺山
 さんに會ひたいんです。忙しくつたつて外の事ぢや無い。會つて下さつても可さう
 なものだ。』

『今夜は可けないのですとさ。だから妾の言ふやうに、明日おいでなさい。』
 と亮子は眞面目に言つた。

『明日来れば今度こそは門前拂ひでせう。へん、紳士の爲す事は大概知れたものだ。』
 『まあ呆れた事はかり言ふのね。』と亮子は全く罪の無い顔をして『貴方の言ふのは一
 から十まで寝耳に水よ。御自分で考へたのか、それとも誰かに水を注れたのか知れな
 いけれど、大抵解りさうなものぢやありませんか、私達が何の怨が有つて那樣事を爲
 たのでせう？思ふやうに成らないからつて人を疑つたり、八つ當を爲たり、夫では餘
 り男らしく無さわ。』

『處が其怨が有るのださうです。』

『何んな事？』

「浅山さんにお聞きなさい……だが、有繁に細君の前では言得ないかも知れない。次でだからお話を爲ませう。」

と言ふ途端に、荒々しく襖を啓けて躍込んだのは浅山だ。

「群松！ 貴様は何を言ふか。」

「恰度可い。貴方の目の前で、是から貴方の悪口を言ふんです。」

「黙れ。」

子供が泣出す。

百九

浅山はドシンと其前に座つたが、直に亮子を顧みて、

「お前は子供を連れて彼方へ行つてゐる。」

「え、だけどまわ可うござりますよ。」

「可くは無い。煩いから彼方へ行きなさいと言ふんだ。」

「ぢやあ子供は置いて來ますが。」と亮子は、ハテ／＼しながら「後生ですから貴方も怒

らずにゐて下さい。何しろ酔つてゐるのですもの。」

浅山は返事も爲ずに群松を睨つめる。

「群松さん、貴方も能く氣をつけて物をお言ひなさいよ。皆間違なんですから。」

「何でも構はんから引込んでゐる。」

と追やつて、浅山はやを膝を前めたが、

「おい。貴様は何しに來たのか。」

「左に角御挨拶を爲ませう。」と群松は吭の乾いたやうな聲で「先日は失禮しました。」

「那樣事は何うでも可い。それから先は何うしたんだ。」

「それから先は。」と息を喘ませて「何うも斯うも有るものですか、貴方が御承知の筈だ。今迄此處で何遍も吹聴した通り、私は狭山の方を廢められたのです。」

「フム、其が何だ？ 那樣事を言ふ爲に、夜中無體に他人の寓居へ押込んで、口から出まかせな暴言を吐くのか。今聞いて居れば俺に怨が有るつて？ 文句を言に來たつて？ 不思議な話を聞くもいだ。俺は貴様等に怨も文句も言はれる覺は無。那樣下等な人間ぢやないぞ。」

「誤間化したつて駄目です。第一……第一自分の良心に問うて御覽なされるが可い。私を斯様目に逢はせたのは、抑も誰の所業です。」

と群松は火のやうに猛立つた。

「知らんよ。」と此方は髭を撫でつゝ、「俺は近來お前とは絶交だから、お前の事に就いて別に注意する氣も無いんだ。」

「注意は爲ないでも妨害は爲るんでせう。僕の一家を苦しめ抜いて、全然破壊して丁はうといふ考へなんでせう。淺山さん、僕を放逐したのは貴方の指金だ。」

「何？」

「秘したつて種が上つてゐる。貴方の卑劣手段なのだ。」

「黙れ馬鹿者、飲つけん酒を飲んで目が眩んでゐると思つて居れば、途方も無い事はかり言ふ奴だ。間違も其程間違へば滑稽だぞ。まあ俺が何うして那樣事を爲る必要が有ると思ふ。淺山とも言はれる者が、可いか……貴様如き木片に等しい人間の食扶持を取のけて、其が何の利益に成るんだ。考へても見ろ。餘り見當違で笑ふ事も出来や爲ん。」

「然うでも言はなければ面目無くつて顔が合はされないんでせう。だが貴方は實に卑劣だ。」

と彼は此時再び座敷へ現れた亮子の方を見た。淺山は冷笑しながら、

「未だ那樣愚痴を言つてゐるのか。貴様は血迷つたのだな。それよりも穩當に狹山の方を執成して呉れるとか、或は又食ふに困るから、何處か好い口を探して呉れるとか神妙に頼んだが可い。」

「誰か？口が腐つたつて言ふものか。」

「群松さん。」と亮子が氣を揉む。

「お前は引込んでゐるよ。」と應揚に制して、

「おい群松、君も子供ぢやあるまいし、最う少し物事を分別して呉れんと困るよ。俺が君を放逐させたといふのは何から割出したのか、其證據でも有るのか。」

「證據？」

「然うとも、他を疑るなら其だけの證據が要る。其を擧げるが可いちやないか。」

證據といふ程の用意は無かつた。群松は唯酔に乗じて其厚顔の鼻面を盪に擦つけてや
らう位な息込であつたのだから、押返して正々堂々の陣を張られると、單騎何處を突
くべきかを知らぬ。

加之に酔は醒める。張合は抜ける。彼は唯默然として目を睜るのみだ。

淺山は居丈高に腕組をして「おい何うしたんだ。何故君は返辭を爲んのか。假にも他
の家へ来て亂暴狼籍を働く以上は、何れ其だけの證據が有るだらう。其證據を舉げ給
へ。」

「私は何も金を取りに来たのぢや無い。別に證據の有無を論ずるには及ばんです。」

「其ならんで根も葉も無い話ぢや無いか。」

「證據一點張で逃げるのですか。良心に問ふて御覽なさい。然らすれば能く解る。」と
群松は沈んだ語調で言つた。

「良心といふものはね。」と淺山は笑ひながら「那樣に矢館と引合に出されるものぢや

無いんだ。何程君が邪推を爲やうが、曲解を爲やうが、其は君一人の勝手なので、我
輩の貴重なる良心に一々其お附合を爲せられた日には飛んだ迷惑だ。」

「淺山さん。貴方は未だ一つ忘れてゐる事が有りませう。私が然う信じて可いだけ
の材料を、私は丁と持つて居るんです。」

「ハ、ア此奴は何ふべしだ。」と猶且平氣で言つたが、淺山の目は異様に輝いてゐた。

「斯う言つたら貴方も大概解るでせう。」

「處が猶且解らんよ。」

葉卷の煙にかくれる顔を見て、群松は屹と唇を噛んだが、さて踏込んで何も彼も曝露
して見た處で、其でも不知を切られた日には結局齒が立たぬのみか、悶接いて耻を晒
すだけ自分の器量を下げねばならぬ。彼は酔の絶頂から醒めて、今は正氣のドン落に
立つたのである。

「あゝ、其では最う何も言ひますまい。」と悄然と頭を垂れて「抑も此處へ来たなんて
其からして私は間違つた。」

「今初めて解つたのかい。」と淺山は妻を顧て強て笑つた。

「酔が醒めて来たのでせう。」と亮子が氣の毒さうに「だけど、まゝ家だつたから是で済んだのですよ。でも疾く氣が着いて可かつた事ね。」

「はい、難有うございます。私も全り考へ直ししました。腹を立て、嘔つかうとしたり人情を振かざして喧嘩を爲やうとしたりしたのは、皆弱者の態度でした。是からは改めませう。如何に美しくつても、清くつても、人間弱い者の位置に立ちたくは無いですね。」

「未だ貴方那樣妙な事を言つてゐるの？」

「捨て、置け、捨て、置け。」と淺山は目配せを爲て「最う少し世間を見たら、將に我の心が解るだらう。群松お前は未だ苦勞が足りんのだ。」

「然うかも知れせんよ。」

と言捨て、彼は會釋も爲ずに立上つた。亮子は心配して、

「最う歸るのですか、それならば一寸でも可いから仲直りを爲ておいでなさい。然うで無いと氣に成ります。」

「仲直り？」と振返つたが「又今度に爲ませうよ。」

「其氣違が直つてからにしろ。」と淺山は其後姿を見送りつゝ大聲で言つた。

百十一

其からといふものは、群松は毎日當も無く出歩いてばかり居た。

或日の事朝から飛出して家に歸つたのは彼は十時近かつたが、何處も彼處も閉つてあつて、座敷は眞の暗である。

「何うしたのだ。誰も居ないのか。」

と二三度呼んで見たけれど、森閑として返事が無いので、彼は舌鼓を爲ながら袂に有つた燐寸を擦り、左右して洋燈へ火を點けた。明るく成つても人氣が無ければ却つて淋しい。

裏の墓原には一時秋風の音がして、耳を澄せば上野の鐘の音が聞える。最う其音も身に泌みる頃だ。彼は慄えながら坐敷へ入ると、其處邊は晝間出た時のまゝに取散されて、唯机の上に通の手紙が載せてあつた。見ると香川の手蹟なので、可憐しさに急ぎ封を切つて讀めば、先づ第一に近頃の無沙汰を謝して、さて此度は突然父の病氣に

ついで歸國したが。其前君に逢ふ暇が無つたのは誠に残念であつた。實は君が狭山の方とも手を切つたといふ話は出立前に上田から委しく聞いた。其については種々君の考へも伺ひたいし、猶小生の思ふ處も遠慮無く述べたいと思つたのだけれど、斯ういふ事は面と向つて言つても左右意を盡さぬ勝である。其のみならず、僕は何うしても言苦いので、或は君の顔を見てゐたらば、終に此事を打明ける勇氣を出さずに終るかも知れない。因で書中涙をふるつて告るが、此際君の家庭に一大改革を爲たら何うか。友人の僕として言ふに忍びん事だけれど、今は君の才を惜しむ世間の一人として忠告する。君が世に立つて大名を成さうとするなら、何うしても家族は犠牲にしなければならぬ。是は冷静に君の身の上を思ふての勸告だ。其爲に僕を怨んで呉れては困る。君がわたら一生を投捨て、人情の爲に自己を殺さうと思ふなら、僕又何をか言はんやだ、考へて呉れ。再考して呉れ、更に再考して呉れ。猶他事ながら僕も歸郷して見た處、父の病氣は到底恢復の見込が無い。醫者は此一週間が難しいと言つてゐる。それで萬一の事が有つたらば、僕は家政の都合上、一二年は東京へ出られまいと思ふ。同じ東京に居てさへ本郷と下谷は遠いやうに感じた位なのに、斯うして草深い田舎に

引込んで見ると、誠に萬里雲を隔つと思を爲る。時々便を寄せて呉れ、お互に淋しい世の中だ。終に臨んで謹んで君の健康を祈る。と書いてある。群松は讀了つて、熱い涙を流した。

「お互に淋しい世の中だ。」

其一句を繰返すと、胸が締められるやうに苦しく成つて、耐へても涙が出る。

「あゝ、此先は何うしたら可いんだらう。」

机の上に俯して、何時までも悶へてゐたが、偶と格子戸の啓く音に心着いて起あがると静に人の入来る足音がして、室の入口にスツと立つたのはお光である。

「唯今。」と軽く會釋して「何うも遅く成つて済みませんでした。貴方、何時お歸りなすつたの？」

「今しがた！お前は又斯んなに遅く……何處へ行つてゐたのだ。」

「一寸用達に！」

「而して家の者は……」

「音居ません。」と机の傍へ座つて「貴方早速ですが、妻少しお話が爲たいのですよ。」

と呢と見詰めたお光の顔色は著しく蒼かつた。

百十二

「何だ改まつて！」と群松は又手紙の方へ目を轉じた。

「外の事では無いんですけれどね。」と火の氣の絶えた火鉢の中を掻均しながら「私達は何時まで斯うしてゐるんでせう？」

「那樣事が解るものか。年季奉公を爲てゐるのぢやありません。二人の中何方か死ぬまで……然も無ければ何方か、飽きるまで續くのだ。」

「然うですかね。」とお光は溜息を吐く。

「其が何うしたといふのだ。お前は徐々飽が來たのか。え？斯うしてゐるのが面白く無くなつたのか。」

「否、面白く無いとは思ひませぬよ。」

「然し其と所帯の苦勞と取交事が出來んのだらう。」

「何有貴方。苦勞は初から承知だつたのですもの。今更那樣事を驚きはしないわ。た

けれど妾此頃になつて急に氣が減入つて耐らなく成つて來たんです。何だか將來の事が見えるやうな氣が爲て、其を見れば見る程壽命が縮みさらうのだ。」

群松は固く腕組をして息を引いた。

「斯う云ふと大變水臭いやうですが、妾何うしても何かに欺されなけりや生きてゐられないんです。以前は三味線だの衣裳だのそれからお客だのに欺されてゐたのですし此方へ來てからも、眞實を言へば爲つけない所帯の苦勞に欺されて、貧乏も却つて面白いものだと思つてゐましたけれど。」

「其から何うしたんだ。」と此方は沈んだ聲で促す。

「今では然う行かないんです。衣が剥けて苦勞の正味を思知つたら、妾眞實に心細く成りました。」

「畢竟其だけの事なんだらう。」

「其だけつて？」

「無駄な事を並べるには及ばん、煎じ詰めれば俺に愛想が盡きたのだ。」

「否、然う取られちや困るわ。貴方になんぞ愛相盡したのでは有りませぬよ。唯妾自

分が斯うしてゐるのが充ちなく成つたのです。其も貴方の爲に成る事なら何んな苦勞でも爲ませう。貴方の爲と言へば張合も有るから、又妾欺されても見たいと思ひますけれど、何の途妾と一緒に居ては貴方の爲に悪いのですもの。此頃のやうに困るのは皆妾が居る爲ですつてね。」

『那樣事を誰から聞いた。』

『お母様から！』

群松は夢の醒めたやうな顔を爲る。

『妾全然聞きませんでした。お母さんが其だけ言つて麻布へ行つておしひなすつたのは、何とか考をつけたといふ謎なのでせう。妾も今日一日考へ抜きました。其揚句何うしても別れた方が可いと思つたものですから、お近は二丁筋で浦和の叔母の處へやり、それから一寸濱町へ行つて妾の身の振方を極て來たのです。最早貴方さへ承知して下されば其で可いの。』

『ぢやあ以前の生活が戀しいのか。』

『別に戀しくも無いんですが、外に行く處も有りませんもの。』

『猶且川立は川で果るんだな。』と群松は強て笑を合んだ。

『貴方は山の人、妾は川に居る方が可いのでせう。其だつて合ひたい時には合へるんですからね。』

『あ、然うか。其處までお前が考へてゐたのなら俺も全然打明ける、有やうは俺も二三日前から其事に就いて考へてゐたのだ。』

『其は大方同じ事です。丁か半か、何れ其中の一つですから。』

『お互に自分を建直さう。繕ひは悪い、一層の事立直さう。』と群松は天井を仰いで言つた。

其翌日の夕間暮、お光は一張羅の羽織を着て悄然と格子の外へ出た。而して二足三足行かけた時、有繫に立止つて涙に暮れたが、それでも二度とは見も返らず、小走に霧次を出る。

其吾妻下駄の音を聞きながら、群松は唯一人殘少の埋火を見詰めた。

楚音終

明治四十二年六月十日印刷
明治四十二年六月十七日發行

楚音
實價金八拾錢

著者 柳川專之

發行者 和田靜子
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者 高塚慶次
東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所 三協印刷株式會社
東京市京橋區弓町二十四番地



發行所

春陽堂

東京市日本橋區通四丁目五番地

(電話本局一六七一七)
振替口座東京一六七一七

柳川春葉齋藤松州氏共編

當日用記

日記界の代表者

實用と趣味の兼備

體裁頗る優美

而して製本堅牢なり

こは本日記使用諸賢の贊評なり

用紙善美記入面擴張記事正確

四十三年度より内容改訂

最も完全なる日記

實價 金六拾錢 郵稅 金八錢

母の心

楠木清方氏書
齋藤松州氏裝
實價金六拾錢
郵税金八錢

母の心は新舊思想の衝突、繼母繼子の關係、兄弟の愛を主題として血あり涙あり慰藉あり而して憐むべき主人公の運命は大なる教訓を讀者に與へんとす是れを家庭に於ける最良の讀物とす

(第四版)

やどり木

齋藤英朋氏書
齋藤松州氏裝
實價金六拾五錢
郵税金八錢

朝早い格子先の霜に梅もどきの二粒三粒散り零れた景色など中々清らかな趣きである

(やどり木二四二頁)

後の世

梶田半古氏裝書
實價金六十錢
郵税金八錢

事業に破れ戀に破れたるものは來つて彼れが「後の世」を見よ
業成りて戀に幸なる人は來りて彼れが運命を吊へ

いさゞ川

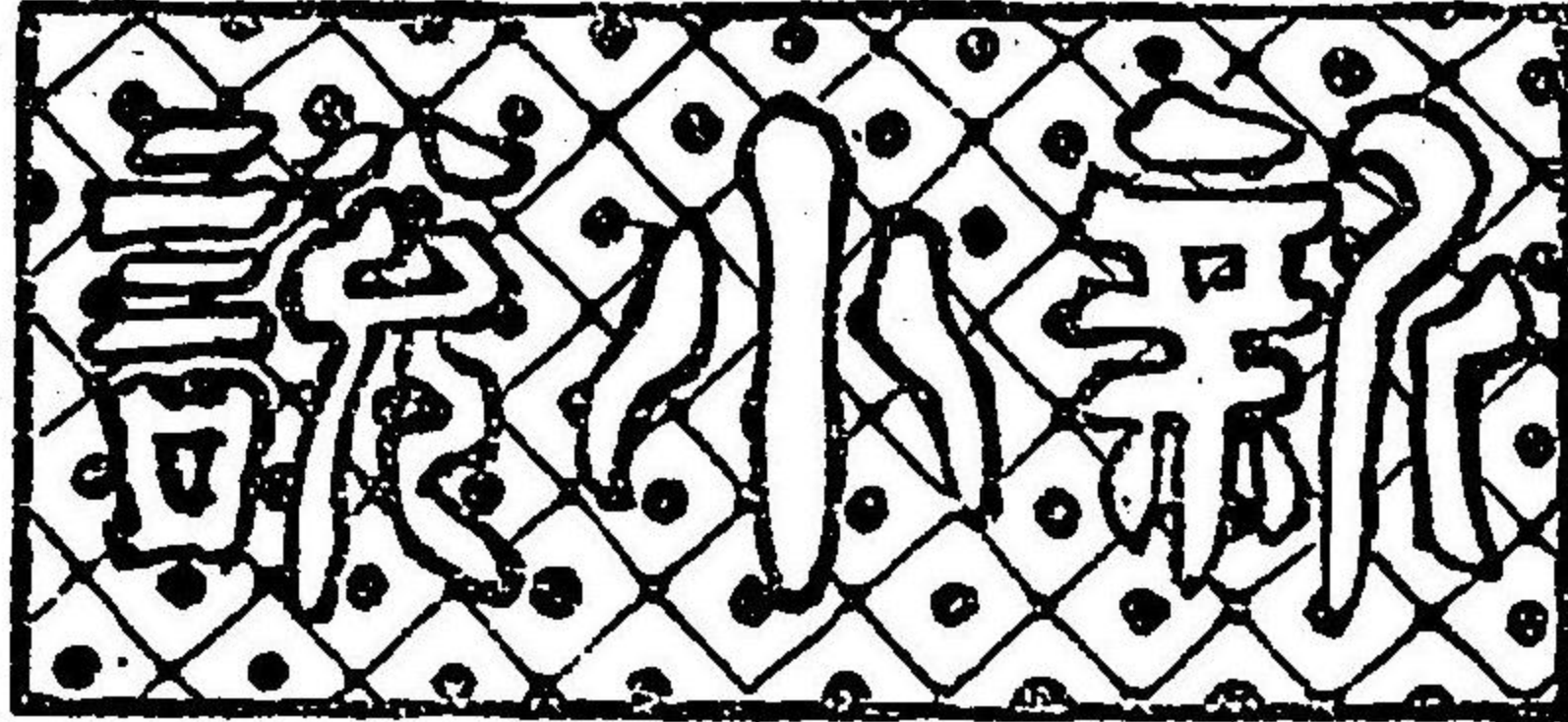
齋藤英朋氏書
實價金四十錢
郵程金六錢

文章典雅にして詩趣掬すべきもの、春葉氏の短篇小説は天下既に其妙を稱せり。本書は氏が筆の作品中より十數種の粹を抜きて裝釘の美挿書の艶麗實に案上の清飯に似す

2-3141

氏外宙藤後 任主輯編

毎月一回



一日發行

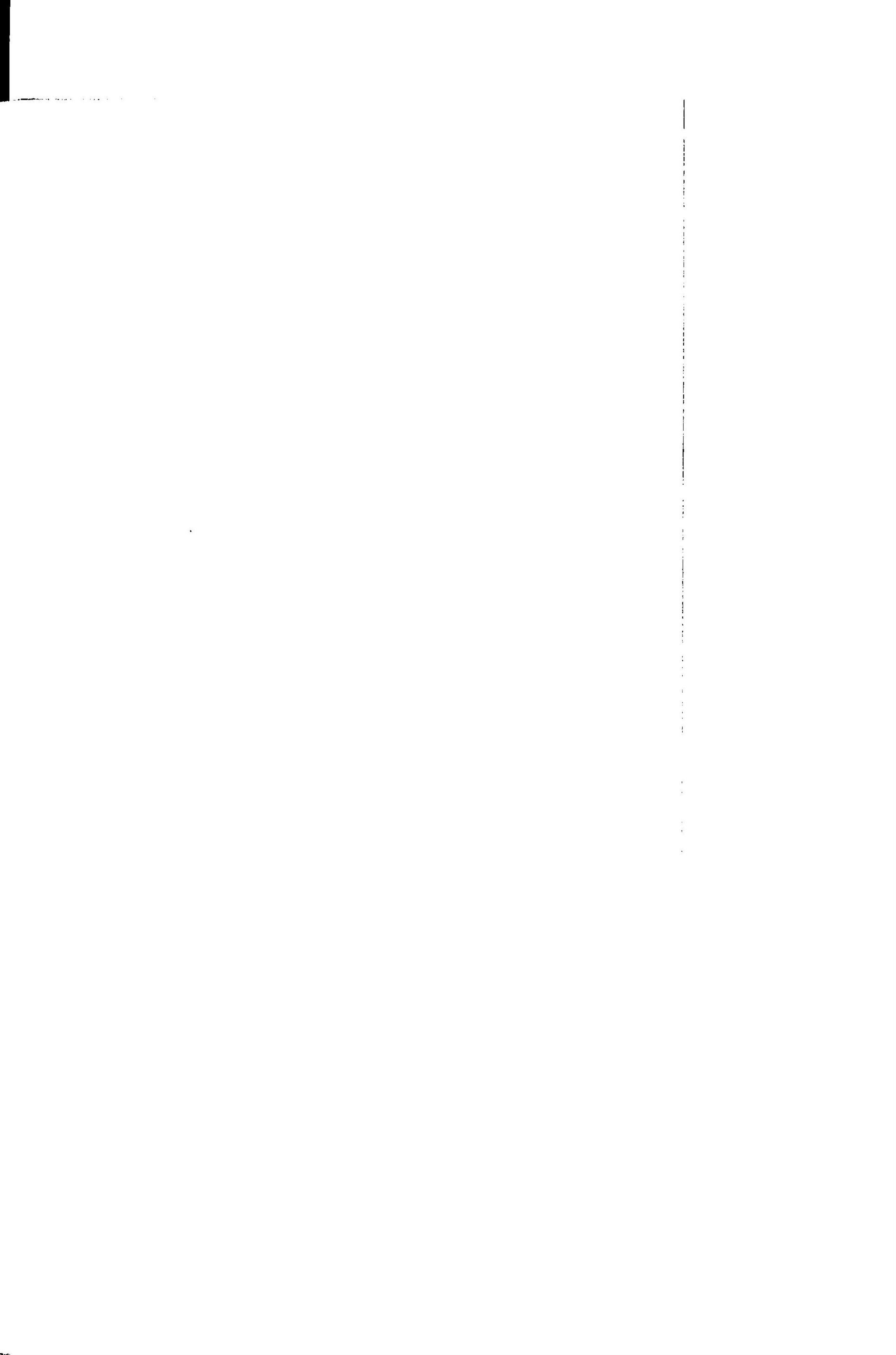
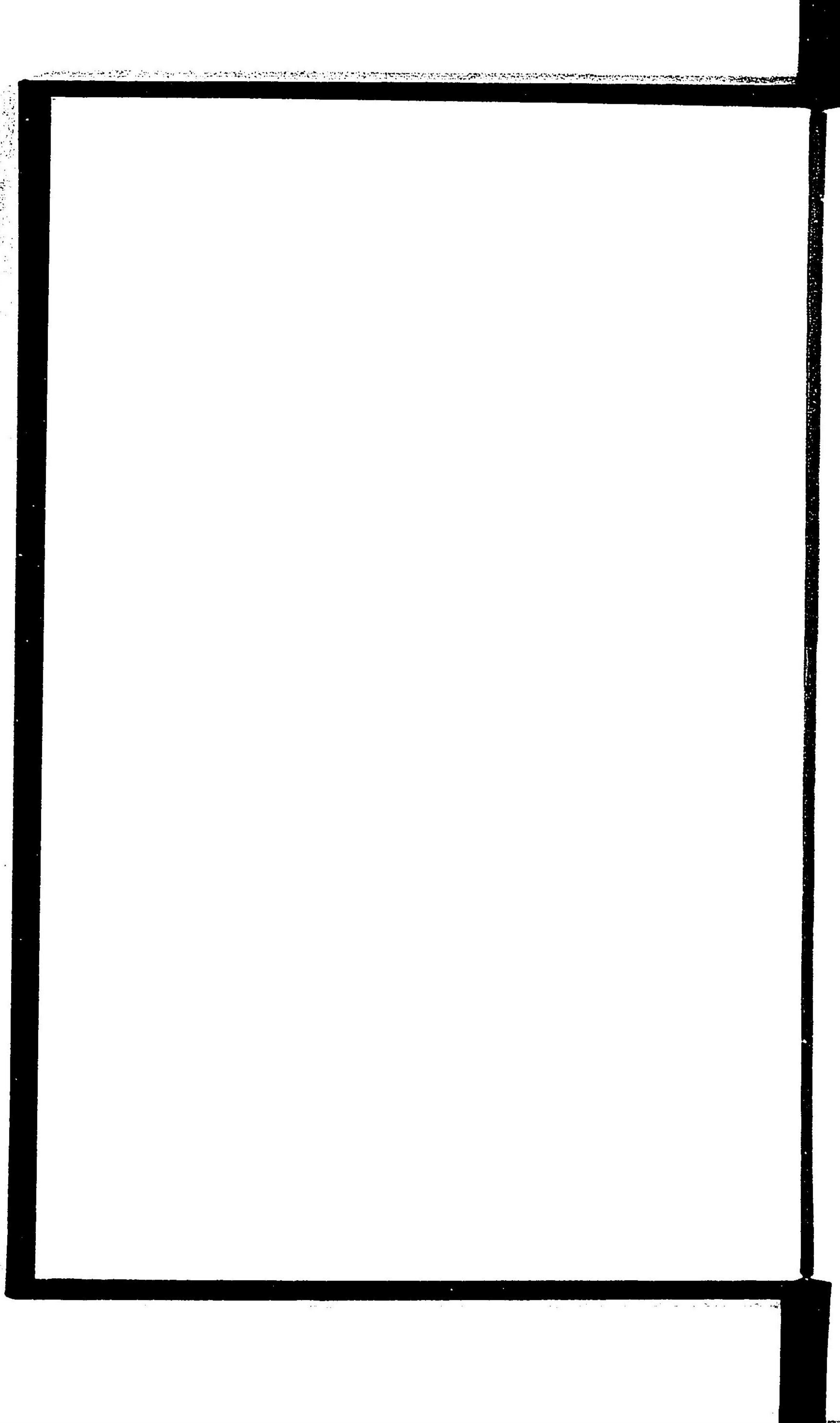
『新小説』は當代文藝の中樞にして、創作、批評は勿論、其他苟も文藝に關する事項は細大收めて洩す事なし、創作欄には現代諸大家の作を網羅し、兼て新進の俊彦を束ね、思潮、時文、我觀錄、雜錄、文苑、譯叢、藝苑、家庭、社會、流行等從來の諸欄は、一層其範圍の擴張と趣味の横溢を期す、尙本年よりは小景、廢談、月旦寸鐵の諸欄を加へ、現代文壇に縦横の馳驅を試む。而も之を裝るに諸大畫伯の彩筆を以てする眞に錦上添花を添ゆるもの、蓋し之れ文藝雜誌界の榕舞臺たり、謹て大方の愛讀を望む、

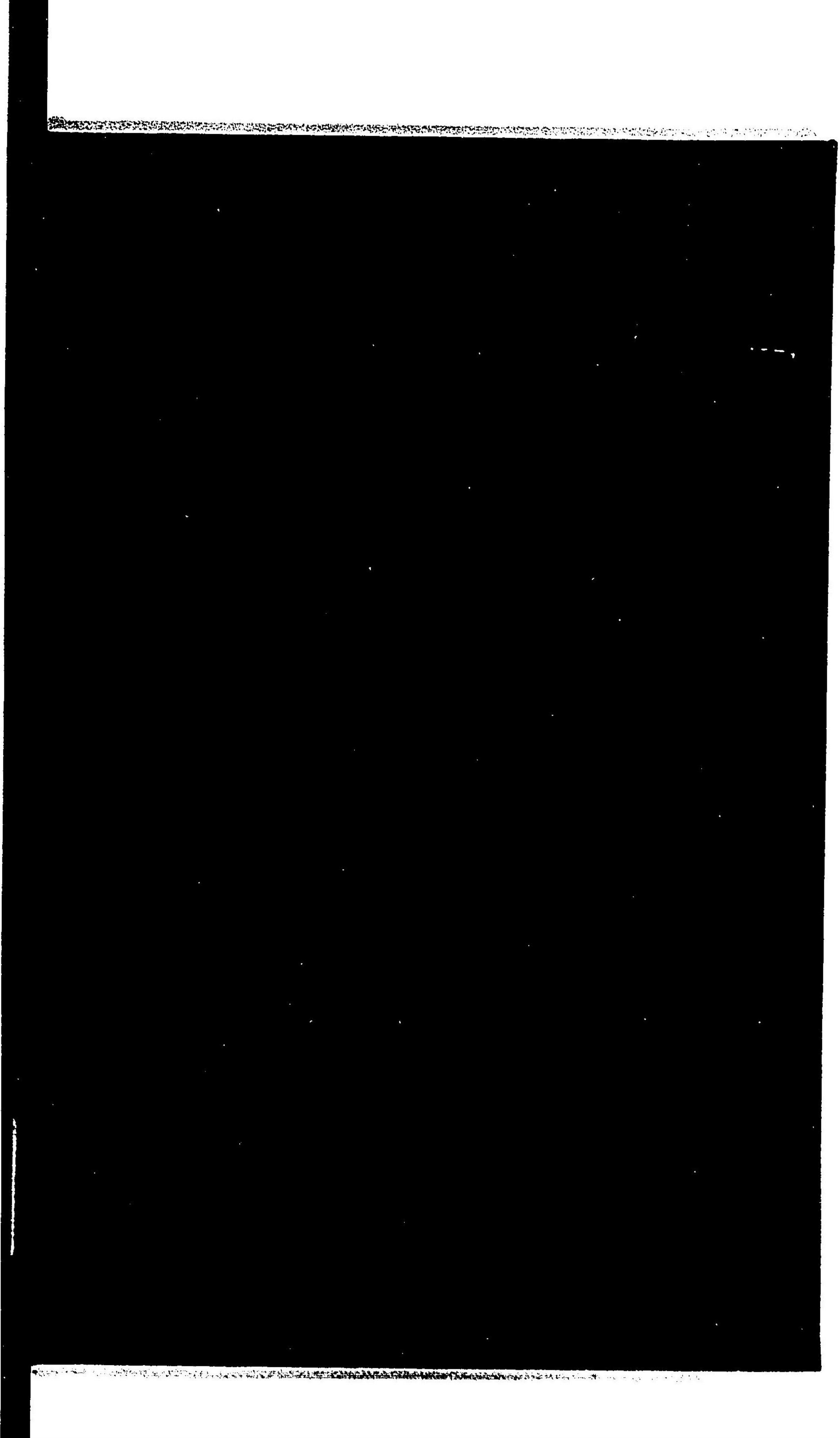
實價 ● 登録費五錢 郵税貳錢五厘 ● 六册前金郵
 價 ● 稅共壹圓五拾九錢 ● 十二册前金郵稅共壹圓
 圓拾貳錢 ● 郵稅代用券別賣(外國は拾四錢)

堂陽春

角目丁四通區橋本日市京東
 (番一十五局本話電)
 番七一六一 京東座口替振

元兌發





27
336

093443-000-0

27-336

跫音

柳川 春葉/著

M42

DBQ-0811



